



慌てる乞食はもらいが少ないなんてよく言ったもので、序盤からポンドのチーダのしたせいで、どれを切っても当たられちまいそうな牌勢だ。

それにしても雨の日の麻雀は牌の手触りが悪い。空調はしっかり動いているはずなのに、どうにもじめじめする。

ベタつく牌を見ながら俺は何を切るか考えていた。

「リーくん、早く切つてよ」

そう急かしてくるのは、対面で立置<sup>リキチ</sup>かけてる事件屋の純ちゃん。しょうもない顎ばかり回しているから、この街では「顎回しの純」なんて呼ばれている。黒く焼き上げた肌に高そうなゴールドのネックレスはいかにもな雰囲気だが、どこか人懐っこいところがあって憎めないのが純ちゃんの持ち味だ。

煙草を吸うペースがやけに早く聴牌<sup>テンパイ</sup>丸出しの下家のおっさんは、デートクラブのフランチャイズで一発当てたマサキさん。俺にとってこいつは大事なカモだし、正直、麻雀の腕はそこの学生よりもひどい。

待ちは萬子の上でほぼ間違いない。まず振り込むことはないだろう。上家の客引きはベタ下りだから問題ないとして、さてこの局面をどうやって凌ぐか――。

「当たりにいってやるから待つとけつて」

二人の間を取ってここは六索でいいか。ドラだが切る根拠が一番あるのがこいつだから、これで当たられるなら仕方がない。

そんな事を考えながら六索に手をかけた時、事務所のドアが突然勢いよく開いた。

「やっぱり純さんここにいたんだ！ ちょっと私の話、聞いてください！」

純ちゃんが指名している、区役所通り沿いにあるキャバクラの女だった。

SNSかアドトラックかなんかで見かけた事のある顔。深夜のドン・キホーテで嗅ぐような甘ったるい香水の匂いがたちまち室内に充滿するもんだから、どうにも調子が狂う。

「ああもう、デコかと思ってやっちゃったよ」

純ちゃんはテンパって牌を倒してしまっていた。単騎で六索待ちだったから、これには助かった。安いレートでも勝負事は負けたくないものだしな。

せめて電話くらい鳴らしてから来てくれよ―俺は言おうとしたが、すぐに諦めた。南場に入ったあたりから純ちゃんの携帯はポン中からの着信が引つ切りなしにかかってきて、サイレントモードに切り替えると怒鳴ったのを思い出したからだ。

しかし明け方の飛び込みの訪問で俺が良い思いをした事なんて、ただの一度でもあっただろうか。ヨレておかしくなっているようなのが街を徘徊しがちなこの時間帯に俺たちみたいなの相談つてなると、ろくでもない内容が必然的に多くなってくるんだ。

別にでかかど看板を掲げている訳でもないが、この街で探偵業の真似事を始めてずいぶんになる。

ウチの場合、紹介でしか依頼人は来ない。だいたいこんな煙たい雑居ビルに相談に来るような客は脛に傷のあるやつばかり。業務内容も非弁行為すれすれのネゴシエーションから、あと一歩踏み込んだら違法な素行調査が主。大手を振って宣伝するようなものではないから仕方ない。

「で、どうした？ 悪い男にでも引っかけたのかよ？」

女に聞くと、内容は案の定、筋の悪い金絡みのトラブルだった。よくあるポンジスキームってやつで、人様から集めたゼニをぶっこんだら自転車がパンクしたってだけの、ありふれた話だ。

こういうのに引っかかる奴って、みんな同じ事を言うんだよな。

すごい時計をしてすごい車に乗っていたとか、キャバクラでえらいゼニ使ってる有名人だとか。あとは何回か本当に配当が来たからとか、そんな感じ。

「そんなの明日でもいいだろうが」

マサキさんが面白くなさそうに牌を崩した。これでもうこの局はノーカンだな。

よく見ると美人なこの女は愛梨という源氏名の売れっ子キャスト、下心もあって純ちゃんが相談に乗っていたらしい。

金を預けたまま飛ばされたのは商社で金の先物トレードをしていたという触れ込みの櫻田という男で、複数の人間から10億円単位の金を集めているって話だった。

愛梨には最初は客として接触してきたらしく、あまりにも羽振りがいいものだから、なんでそんなに金を持っているのか？ と愛梨が聞いたのがそもその発端。

そこから、

「愛梨ちゃんもお金を増やしたいなら自分に投資してみないか」という流れとなり、

「F店のHちゃんやD店のKちゃんからお金を預かっている」  
なんてふうに、愛梨が尊敬している歌舞伎町の有名嬢の名前を出したのも、当然ながら櫻田の策略だった。

預けた金額は800万になっていた。配当で1割を一度だけもらっているから、それを差し引いても700万と少し。

愛梨の馬鹿なところは、そのたった一度の配当をもらって信じ込んでしまい、多くの友人を櫻田に紹介してしまった事だった。この辺がポンジスキームの厄介なところなんだよな。

「こんなすごいコネクションを持てた自分はなんて幸運なんだろう。お世話になってるみんなにも教えてあげなきゃ」

配当をもらった直後の愛梨の頭の中といえば、こんなかんじだろう。たった一度、しかも自分が出した金の一部を戻されただけで舞い上がっちゃって、自らポンジの営業マンになっちゃもうんだから始末に悪い。

こんな心理状態はプロの詐欺師はとっくにお見通しなわけで、恩返ししたい人がいたら特別に連れてきてもいいだの、配当の一部は愛梨ちゃんにつけてもいいだの

と、あの手この手の甘言を呈して営業マンをその気にさせるってわけ。

事実、愛梨の友人がさらに紹介した枝まで入れると、被害額は億を超えていた。櫻田からすれば、たった80万そこいらの出費で億からの金を集めることができてしまったわけ。それも口先ひとつで、だ。

一方の愛梨は自分の金はもちろんのこと、親友やら太客やらの金まで差し出してしまった挙句、それが期日までに返ってこないとあって、針の筵に座らされている状態ってやつ。血相変えて純ちゃんを頼りに来たのもわからなくはない。

「でもどうしてここがわかったんだ？ 純ちゃんに聞いてたのか？」

気になった俺がそう聞くと、不服だったのか愛梨は頬を膨らませながらこう答えた。

「えっ、この探偵事務所、純さんがオーナーだって……困ったらここに来いって言われてたから……」

キャバ嬢に良い格好をしたくて純ちゃんはまたフカシを入れていたのか。いつもの事なんだけど、予想通りすぎて呆れてしまった。

「俺に任せれば大丈夫だって、イージーイージー」

純ちゃんは愛梨にこれくらいの事を言っていたらしい。

「違うよ、シノギになるかもと思って風呂敷広げといただけだからな？ わかるだろリーくん」

純ちゃんはそう耳打ちしてきたが、実際の所はわからない。

とりあえずは安請け合いに巻き込まれる格好で愛梨の話に耳を傾けていると、話が見えてきた。

ボンジに気付いた愛梨が櫻田を喫茶店で問い詰めていたら、続々と他の債権者が駆け付けてきたらしい。押しかけた男たちは櫻田にヘッドロックをしたまま、別の店に連れ去ってしまったとのこと。せっかくみつけた獲物を横取りされてしまった愛梨は、このままでは自分が返してもらえない金がなくなってしまうと慌てて自称・探偵事務所オーナーの純ちゃんを頼って駆け込んだというわけだ。

「そこ、不良っぽいのか？」

純ちゃんがそう発した。七三分けの本物もいる時代だから、この質問の回答がどうあれ何の根拠にもならない。

とはいえ、愛梨の話では櫻田のガラを持っていったのは人数が多いだけでそうタ

チは悪くなさそうだったから、様子を見に行ってみるかかって話になったんだ。

5月某日、歌舞伎町が朝日を迎えるほんの2時間前くらいの出来事だ。

外からはベランダのポロい室外機を叩く雨の音がぼんやり聞こえていた。

\*

巷では見かける事も少なくなった事務所のCDラジカセからはFugeesのReady or Notが流れていた。

繁盛しているとはおおよそ言い難い私立探偵事務所だけど、バイトを雇っていた時期もある。2年くらい前、収集癖がひどかった細田ってやつがごみ置き場から拾ってきた東芝のポロいラジカセが妙に気に入って、それ以来置いている。今じゃ埃をかぶったFugeesのアルバム「The Score」もこの時に拾ってきたものだ。

「here I come, you can't hide」

ローリン・ヒルがこう歌っているところで俺は音を止めた。キリトリするにはゲンのいい歌詞だ。そんな気分でもあったから、よく覚えている。

「よし、車回して来いよ。櫻田のガラ抑えに行くぞ」  
襲撃に出るメンツは、俺と事務所のスタッフ二人、こういうのは絶対ついてくる  
純ちゃんになぜかマサキさん。上家の客引きは舌打ちをして帰った。

櫻田が連れ去られた場所は愛梨が抜け目なく把握していた。現場の場所を聞いて  
驚いたんだが、普通の中華料理屋なんだよな。

そのうえ職安通り沿いと来たもんだ。本気で詰めにいくならこんな店は絶対に使  
わない。通報リスクがあるし人目につく。そんな店で掛け合いするのがプロである  
はずがない。

「これあれだな？ 囲んでるのって素人じゃないか？」

純ちゃんも同意見だったが、お前は何の玄人だと言うのか。つい口から出かかっ  
たが、士気を削ぐのもなんだしやめておいた。

予想はドンピシャだった。現場に急行したら、まばらではあるが一般のお客さん  
もいる店内で男たちが櫻田を囲んで押し問答をしていやがる。トラブル慣れしてい  
ない様を見て、これはもう大丈夫だと確信した。こいつらは間違いなく、何もでき

ない。

「あんちゃんたちさ、悪いけどこいつ一瞬だけ俺たちに貸してくれないか？ 用が  
済んだら返すからよ」

櫻田の横に座るリーダー風のGUCCIのジャージくんに言ったら、すんなりと  
身柄をくれた。

むろん、演出は欠かさなかった。マサキさんは絶妙に和彫りが見える角度で尖っ  
た雰囲気醸し出してし、純ちゃんに至っては小芝居を始める始末。

「ご苦労さまです、会長ちよつと今手が離せないんで、私のほうから折り返させて  
もらいます」

どこの親分から電話が来た風だが、100%エア電話だろう。

聞けば櫻田を囲んでいた男たちは大学生や会社員からなる即席の連合体で、知恵  
も回らず暴力的な後ろ盾があるわけでもなかった。

誰だって面倒事に首を突っ込みたくはない。それは俺達だって同じだけど、こ  
の街で生き抜くには勝てなそうな相手にはさっと引く事も大切なスキルなんだ。

デカイ看板があるわけでもないのに誰にでも食ってかかってくようなやつは生存率は著しく低い。本当に引けない場面以外では見極めも重要になる。

「櫻田くん、って言ったか。僕たちと落ち着いて話でもしようじゃないの」

ボンジ野郎の肩に手を回した純ちゃんが席を立つように促す。俺たちは四軒隣の地下のカラオケ店・Mの個室に移動した。

このカラオケ店の気味が悪いのは、個室の張り紙に「店内での花火は禁止です」って書いてあるところなんだ。

店主である韓国人のおばちゃんもそれが花火ではないことは知っているはずだけど、まあそう書いてあるわけ。音が鳴っちゃまったって事をこういう洒落にできるのは、この街の好きなお店でもある。

実際こんなところに連れ込まれたら嫌だろう。見回りが絶対に来ない地下の個室。言葉の通じない店員さん。どうにかしてトイレに逃げたってケータイの電波は圏外と来たもんだ。

さて、櫻田。こいつにはいくら残っているのか。

ボンジ野郎の末期は驚くほど寂しいもので、何億集めていても最後には数万円しかないなんてのはよくある話。ボンジをそれっぽく見せるために出資者の一部には配当を付けたりとゼニの出入りが激しいからな。

櫻田もそうだった。ざっと調べたかんじ、全然現金がない。

「お前よう、なんでそれしかないんだ！ 愛梨の金はどこに行ったんだよおっ！」

純ちゃんは唸り飛ばしてたけど、櫻田は青い顔して下向くだけ。

ただ、こういうヤツって派手に遊んでいた時のお釣りがどこかにあるものですか。それを見極めるには携帯取り上げてLINEやらSMSやら見るしかないわけよ。

しかしネットバンクにログインさせても、仮想通貨を持ってないか調べるため色んな取引所にログインしても、まったく資産がない。メールをチェックすれば督促の嵐だし、金の先物取引に使う証券口座にも50万しか入っていない。

「前に私に見せてくれた口座には何億も入っていたじゃない！」

愛梨はそう言っていたが、櫻田の画像ファイルには残高を偽装した口座のスクショがいくつも入っていたから、どうせそれを見せられたのだろう。写真で口座残高を見せるようなやつは詐欺師と断言している。最近の偽の銀行サイトを作ってログイ

ンするところから見せる手口さえある。FXの凄腕トレーダーを自称するある詐欺師は、客の前でチャートを開いてトレードをし、あつという間に数百万を稼いでみせたが何のことはない。客は事前に録られた動画を見せられていただけだった。

もうこれは厳しいかな——落胆しかけた時に、LINE解析担当のごとく櫻田のスマホを見ていた純ちゃんが大声を上げた。

「あ！ あった！ お前キャバクラに積立してるだろ！」

櫻田がこの街の有名キャバ嬢にバーズデー積立金なる名目でゼニをデポジットしている痕跡をLINEで見つけ出したらしい。

「そんなことしてないですよ！ それ、キャバ嬢にリップサービスで言っていただけ……」

「いや、してるね。じゃあなんだよこのLINEは。なあ？」

セルフブランディングのために有名嬢の太客になる事で金回りの信用を付けたかったのだろう。キャバ嬢を引っかけられるためによく名前を使っていたF店のH、それとD店のNに多くの積立をしていた証拠が出てきた。その女どもの誕生日なんか何か月も先なのに大したもんだよな。

文面を見るに櫻田は人様からかき集めたゼニでスケベな事をしまくっていた。これだけ使えば超がつくほどの売れっ子キャバ嬢でも簡単に抱けるものなのか。LINEを見ていくと金を使った嬢とはたいいていセックスをしていた。

「この野郎！ Hちゃんもヤツてるじゃねえか、お前！」

指名が被った純ちゃんは嫉妬心からか櫻田をグーでビンタしている。長髪の櫻田の顔は痛みと恐怖で歪み、前髪がぐしやぐしやになっていた。俺も数秒だけ櫻田に電気を当てた。

「それやめてくださいっ！ 全部正直に話すので……あああっ」

歌舞伎町には武器屋がいくつかある。もちろん防犯グッズ専門店という名目だが、お気に入りのタイタン社のスタンガンを当ててみたんだ。櫻田は素直になった。

さて、本番はこれからだ。櫻田の埋蔵金をサルベージできる可能性はグツと高くなり、俺達のポルテージは上がる一方だった。

[here I come, you can't hide]

出掛けに事務所であっていたローリン・ヒルの歌声が頭の中で鮮明に蘇った。

\*

いつだかに債務者から取り上げたデイトナの針は4時23分を指していた。好きな時間を少し過ぎた頃合いだからよく覚えている。

職安通りのドン・キホーテの反対車線を少しガードの方に歩くと辿り着くカラオケMは、俺やこころへんの不良には馴染みの深い仕事場だ。ガラを押さえた詐欺師が泣こうが喚こうが、あるいは殺気立った俺たちがそいつをぶっ飛ばして大きな音が出ようが、店側は滅多なことでは介入してこない。

お気に入りのキャバ嬢を先に抱かれていた嫉妬心から櫻田に鉄拳制裁をくださった純ちゃん。挨拶代わりに涼しい顔でスタンガンを一発当てた俺。2人のコンビネーションは櫻田の口を開かせるには十分だった。

「なんでもしますから、暴力はやめてください。皆さんにだけは本当に、本当のことをお話しますので勘弁してください……」

もう一息だな。面白くなった俺はバチバチっとスタンガンを鳴らす。火花がしっ

かり見えるように櫻田の目の前で何度も何度もスイッチを押す。

しかしもう当てない。すれすれでも当てないんだ。こいつは当てすぎても慣れてしまう。痛いけど死ぬ事はない——こんな風に開き直られても困るからな。

「それだけは本当にやめてください、ね、話しますから。気絶しちゃいますよ。そうしたら話せないでしょ？ スタンガン、しまってくださいよ……」

懇願する櫻田はすっかりおしゃべりマシンと化した。この程度のカマシで済むなら安いもんだ。

もういいだろうと思った俺は純ちゃんとマサキさんに目配せした。

「愛梨と周りの分だけでも何とか金策してみろよ。そうしたらもうお前の事は触らねえから。キャバクラにデポジットしている金、あるだろ？ まずはお前の事は触ら引き上げに行くぞ。手間かけやがってムカつくなあ、お前」

吐き捨てるように純ちゃんは言ったが、付き合いの長い俺は目の奥に隠した歓喜を見逃さない。

一度おしゃべりマシンにしてしまえば、今ある分を回収するのはそう難しいことではない。俺たちにLINEやSMSをすべて見られているから嘘をつき通すこ

ともできないし、やけっぱちになって何でも教える公算が高い。

「積立はもうないんです」

最初こそすつとぼけていた櫻田も店からそれを回収するのに協力的になり、各方面に電話をかけ始めた。

判明したのは、F店に1000万とD店に600万のデポジットだった。現金を隠す意味で散らしていたのかと勘繰ったが、単純に流れで預けたのだという。もう自転車操業の額が大きくなりすぎて、櫻田は何の気なしにデポジットしていたらしい。雑にも程がある。

幸い店の責任者は2店舗とも純ちゃんがよく知る人物だった。櫻田本人が来店したら返金するとの事だったので、四人で櫻田を囲みながら車で集金に回った。朝方にもかかわらず1600万円もの大金をサルベージできたのは運がよかったし、純ちゃんの顔もあった。

普段はキャバクラで散財する浪費家の相棒を疎ましく見ていたが、飲み散らかすのが役に立つこともあるってのがこの街の不思議なところでもある。

「ちよつと入用になったから、一瞬戻させてもらうね。倍返しにするから安心し

て」

「バカラで負けこんじゃってさー。一瞬お店のお金使わせてもらうね。大丈夫、勝つても負けてもHちゃんのバースデーはちゃんとするからね♡」

一旦預けた金を引き上げるわけだから、キャバ嬢にはLINEでこう説明していた。文面を打ったのは櫻田本人ではなく、もちろん俺。

てめえの金を他所には逃がすまいと勘繰る女達にはハートの絵文字でも送っておけば、いいという安直な考えで櫻田っぽいテキストを送っておいた。

「なあ、お前あそこの○○ちゃんはまさかヤツてねえだろうな？」

「あそこの○○ちゃんはどうなんだよてめえ」

櫻田がどこの誰をこましたか純ちゃんは気が気でない様子。車が信号で止まるその度にしつこく奴を問い詰めている。

愛梨が事務所に飛び込んできてから3時間が経った頃合いか。この時点で愛梨が投げた以上の金の回収に成功した俺たちではあったが、話はそう簡単ではなかった。問題は愛梨の「枝」だ。欲に目がくらんだこの女は周りにも櫻田を紹介し、何人

も送客していた。

「私の紹介した人の分も返してもらわないと、責任が私に来ちゃう。ねえ、純さん、どうしよう……」

途方に暮れてみせる愛梨。だがこの女も結構曲者なわけよ。

気になる点がいくつもあったから、俺は遠慮なく突っ込んだ。

「櫻田とのやり取りを見てると、お姉ちゃんもこいつから紹介料をもらってみたいり、傍から見たらグルみてえなもんだよな。その理屈わかる？」

「それは……私は櫻田さんを信じていたから……良い話だと思って友達に教えただけで」

「本当か？ 薄々は自転車操業だって気付いていたんじゃないか？ 先週も新規のカモを紹介しているようだけど、なんでだよ？」

「新しい投資家を紹介すれば私の分はすぐに返せるって言われて。それで仕方なく……」

押し問答をしていると愛梨はしくしくと泣き始めた。狙って涙を見せているようにも見えたが。だとしたらたいした役者だよな。

妙に色気がある表情をするもんだから、こっちが悪いことをしているような気にもなってくる。俺からすれば当たり前の事を言っていただけに男つてのは損な性分だよ。一方でこの状況に妙な恍惚感を感じてしまっている自分もいるから厄介だ。

「愛梨ちゃん、泣くなつて。悪いのは櫻田なんだからさ。ほらリーくんもあんまいじめるなよ」

下心の塊と化した純ちゃんは声を震わす愛梨の背中をさすってやがる。目だけは真剣な風を装っているけど、鼻の穴はぷくりと膨らんでいて、なんとも不気味だ。

さて、マサキさんの計算によると、依頼が受けられた分だけで残金は8200万。これは普通に考えたらもう取り戻すのはなかなか難しいという金額。

こうなってくると、新たに仕事させるしかなくなるんだよ。鵜飼いの鵜みたいに首に縄をつけて、再度金集めをさせるしかないんだ。

悪意のジョーカーをテール向かいの見ず知らずの誰かにそっと引かせたら、その場を静かに立ち去る。そして自分はまだ厄ネタに触らないように同じカードでは二度とトランプ遊びはしない。それがこの街のそこら中で行われている詐欺師のバ

バ抜きだ。

「なあ櫻田、実際お前まだ金引っ張れるところあるのか？ 大口の債権者のリスト、これに書いてみるよ」

テーブルに置いてあったチラシを裏返して、俺は櫻田に返済見込みを考えさせることにした。

投げつけたボールペンがワンバウンドしてテーブルの下に転がる。それを拾う櫻田のケツを純ちゃんが思い切り蹴り飛ばした。

\*

「実は金策できる心当たりがいくつかあります。こんな時間ですが、もしかしたら出るかもしれません。連絡してみましようか？」

キャバクラに預けていたデポジットを回収した俺達がおも残金8200万円を吐き出させるべく圧をかけると、櫻田はこう言った。

これ、追い詰められた詐欺師が土壇場で口にする台詞ナンバーワンなんだよな。

こういって電話をさせたが最後、ケツモチの不良に連絡されるのはよくある話。あるいは別の債権者に連絡して現場にこさせ、俺達にぶつけるパターンだって考えられる。この状況下で誰に連絡させるかはシビアに見極めなければならない。

「長いお客さんでトータルプラスの人もいます。しっかり引っ張って愛梨さんの周りだけでも今日中に返済するので、僕に電話させてください」

櫻田はメモ用紙に自分がカモにしてる太客の名前を書いて寄越した。

嘘だろ。それを見た俺達の率直な感想だった。

「リーくん、これってあの人だよなあ？」

「櫻田、この人って地元○○の人じゃないか？」

マサキさんも純ちゃんもさすがに気づいたか。櫻田が汚い字で書いて寄越したりストにはいわくつきの名前が並んでいた。まるで俺達を試すかのように。

某広域組織のびっくりするくらい親分から8000万。某中国系組織からも3000万、他にも同和団体幹部から10000万も引っ張ってるじゃないか。

「お前何考えてるんだ？ 詐欺師ってのは踏み倒せる弱い相手探して金引っ張ってなんぼだろうが。なんだよこれ」

これは非常に寒い。このままこいつの身柄なんか握っていたら大きなトラブルになりそうだし、あるだけ回収して放り出しちまった方がいいな。

純ちゃんなんかはさつきまで優しくしていた愛梨に「もう満額は諦めろ、愛梨ちゃんも泣くとこは泣こう」なんて撒取モードで説得をしている。

どこまで行っても路地裏のドブネズミが群れを成しているだけの俺達が大きな組織とぶつかった時に勝てる可能性は限りなく少ない。甘い汁をすすめるだけでなく、幾度となく酸っぱい思いも味わってきた俺達はよくわかっている。

夜はすっかり明け、時計の針は9時を指していた。

「どうするリーくん？ 引っ張れる自信はあるみたいだけど……」

「けど不良の金ってわかってポケットにしまいこんでも後から寒いだろう。脂っこいようなのはやめて知らない名前の方から当たるか？」

「これとかどう？ 俺聞いたことあるよ、これマルチ商法のやつだろ、なあ櫻田？」  
純ちゃんが目をつけたのはライフなんちゃらという名のマルチ商法グループだった。そのボス格である松川兄弟つてのがいて、櫻田は2000万預かっているが

すでに4000万も払い戻しているらしい。

これは明らかに何かあるな。櫻田の襟を掴んだ俺は畳み掛けた。

「お前そこから中飛ばして行くせにどうしてこいつだけ儲けさせるんだよ？ 偉い親分の銭だって遅延してるのによくマルチ屋なんかにしっか金回すよな」

すると櫻田は困ったような顔でぼそぼそと呟いた。

「だってその人怖いんです。静岡でも有名な半グレみたいで家にもすぐ来るんです……」

このくだりを聞いて純ちゃんが色めきたった。松川の地元に詳しいような仲間下次々と連絡しては、その力量を測る材料を必死に集めている。こういう時の純ちゃんのスマホさばきといたら、見事という他はない。両手の指を起用に使って電話、LINEにテレグラムと頭の中のデータベースに照会しながら、静岡方面の不良たちに連絡を入れている。

結論。松川なんて誰も知らない。料がってるだけのマルチ野郎なら確かに話は早いかもしれない。

「こいつさあ、もう元本2倍くらいになってるんだろ？ めんどくせえから、それ寄越せって言った方が早くない？ なんか材料ねえのかよ」

純ちゃんが櫻田を問い詰めている間に俺は再度LINEのやり取りを見直していた。するとひとつの穴を見つけた。

「これなんだ？ お前ら弁護士巻き込んで金集めのエビデンス偽造してたのか？」

松川は自己資金を入れていた訳ではなく、人を櫻田に繋いでその金をピンハネするような事をしていた。借入書を巻くのは櫻田、繋いだ自分は金が出た瞬間に手数料を取って後でトラブっても知らん顔という寸法だ。

櫻田は紹介された客をクロージングしやすいように銀行の残高証明書や証券口座の取引履歴なんかを偽造していたんだけど、その指示をしていたのも松川だった。

要するにポンジの共犯みたいなもん。松川は全部わかったうえで櫻田にカモとなる投資家を送客してたってわけ。運用なんてしない、できないポンコツ野郎の櫻田をもったいつけて銭出しそうな連中と引き合わせていたわけだ。

驚いたのは、そのやり取りをしているグループLINEに元弁護士までいたって事。こいつどんな弁護士だったんだろうと検索してみると、ヤクザのお抱えみたいな弁護士だった。それも、700万の着服で業務停止2か月を食らった後に今度は1億5000万の着服がめくられて除名になっている筋金入りの泥棒だ。一年中ケツ

に火がついてそんな野郎の動きだなと思って笑っちゃったよ。

騒ぎになったら相当まずい。松川だってそれくらいは認識しているはずだ。急所を見つけた俺はすぐさま櫻田に電話をかけさせた。挨拶もそこそこに、櫻田から電話を取り上げる。

「松川さん？ 櫻田被害者の会代表のもんだけだよ。このガキの身柄取っておたくとのやり取り全部見たんだわ。お前、随分な事してくれるじゃねえか」

面食らった様子が電話越しでもわかる。そこからは俺と純ちゃん電話を回しながら唸り続けた。

「よう、お前が仲介した投資家さんたちってのは、この残高証明がフォトシヨップで作られたもんで知ってるのか？ 全部スクショとったんだけど、一件一件回っていくかよ、松川クンよお」

「お前、静岡で有名な半グレらしいじゃん。組関係にさんざん照会かけたけど誰も知らねえぞ、お前のこと。なんでだ？ まさか騙りいれてんじゃねえだろうなあ、オイッ！」

「櫻田は俺たちに返すはずの銭、お前に吸われて払えないって言うんだわ。どうす

んだ小僧、デコにでも走るか？ 不良でも呼ぶか？ あんま時間とらせんなよ、ガキが」

櫻田にとっては怖い半グレに映った松川だがそこまで弁が立つわけでもなく、何より不法行為の証拠を握られているかもしれないという恐怖から防戦一方。蚊の鳴くような声で泣きをいれてきた。純ちゃんなんか数分間に「殺すぞ」って二十回くらいは吠えてたんじゃないかな。

結果、すんなり取れたんだよ、これが。元本を抜いた分の2000万をすぐ振り込んだから金輪際連絡はしないってところで落ち着いた。向こうからすれば絶対に警察沙汰が嫌だったのだろう。

振り込みが済んだという一報を受けるまで、俺達はなんだかんだ昼過ぎまで例のカラオケ屋にいた。櫻田を嚴重ガードしながら銀行窓口で金を下ろさせてようやく撤収となったんだ。

「今日はある程度形作ったから帰るけどよ、櫻田。てめえ全部返すまでつきまとうからな」

そんな捨て台詞を吐いて長い夜は終わった。

櫻田とはまたすぐに会う事になるのだが、ヤマとヤマっていうのは別々のタイミングで来てくれないんだよな。

この俺が相対性理論でもないが、ローレンツ収縮によって時間の相対性は時に不思議な現象を生み出す。この街の住人が生き急げば生き急ぐほど、俺たちを取り巻くトラブルの質量は大きくなっていく。

矢継ぎ早に起こる様々なそれは、櫻田との再会を前にしてすぐに俺達の前に現れた。あいつがこの街に帰ってきたんだ。

9、9、9。あいつに勝つにはここで決めるしかない。

すべては向かいのババアがいけねえんだ。エステという名の抜きあり無許可風俗をやってるババア。ヒアルロン酸にリフトアップの金の糸だかをぶちこんで若作りをしているが、とうに還暦を過ぎているはずだ。

このババアは俺と同じ方向に俺より少しだけコマを多く置いてトランプを触ろうとしてきやがる。それもえらい時間かけて絞るもんだから、頭に血が昇って仕方ない。

これ以上ババアに触らせたくなくなった俺は、マックスベットすることにした。

するとババアは自分でめくれられないもんだから俺の追っかけをやめてプレイヤーに2万だけ。俺はテーブルの上限いっぱい、バンカーに50万分のチップを置いていた。景気づけに一杯引っかけてから賭場なんかに来ちまった俺も悪いのだろうが、にやにやして俺を見てきやがって。

バンカーのフェイスは絶望のピクチャーカード、キングのおっさんまで俺を笑っていやがる。

角から絞る、足はある。横から絞る、ハートが四つ。

これで丁半博打だな。大丈夫、俺なら引ける。そう自分を奮い立たせながら深呼吸をしていると、

「オニイサン、はやくしてヨ」

だとよ。お前にその台詞を言われるとはな。

カードの真ん中に刻み付けられたメイクナインを表す一点のハート。そいつをババアに叩きつけてやろうと思って一気にめくった俺の目に飛び込んだのは10個のハートだった。

「プレイヤーウィン」

ディーラーは静かにそう告げると何事もなかったようにカードを回収していく。

「よお、シラけたから帰るよ。明日来るから端数預かっといってくれ」

ああ、しょうもないゼニを使っちゃった。財布が軽くなってからじゃないと後悔ってやつはできないものだよな。来る時は夢いっぱい気分が悠々と乗り込んだはずのLビルのエレベーターに、帰りはシケたツラで乗り込んだ俺。通りに出ると俺はサビでもらった煙草に火をつけた。

「あ、リーくん、おつかれっす」

博打屋専門の引き屋グループを束ねる佐野だった。花道通りを根城に素人に声を

掛け、バカラ屋、スロット屋に引き込むシノギを組織的にしているやつ。ぽっと出  
なんだけどケツが強いんだ。

「なんだよ？ まさか俺がすべった話でも聞きつけて来たのか？」

「へへっ、それは知らなかったですけど、そんなリーさんに朗報！ 新店できたの  
知ってます？」

どうやら裏スロ屋が新しくできて、設定がいいって話のようだ。

「顔出すのはいいけど滑ったのはスロットなんかで戻る額でもねえからなあ。なん  
だよ、新規引くとそんなにもらえんのか？」

「まさか、どこも一緒ですよ。そんなじゃなくて、置いてある台のラインナップ  
がヨダレもんでして。どうです？ 初回1点サービス、ほら！」

袖を引かれて連れられてったのは期待が半分と、こいつの面倒見の山上さんも関  
係してる店だと踏んだから話のネタにでもなればいいなというのが半分。

そもそもスロットで半帯はなかなか戻らねえよ。100円の台は確実に設定1で  
裏設定も地獄、40円でも閉店まで後数時間だろう？

店に入ると確かにオールドファンには懐かしいラインナップだ。3号機にCT機

まであるもんな。この街でこれくらいわかっている品揃えをしたのは何年前かに  
「行列のできる裏スロ店」としてニュースになった金田兄弟の店くらいだ。

懐かしい思い出に胸を馳せながら店内を一周していると、あいつがいた。旋風の  
用心棒で天井近くまでハマっている純ちゃんだった。

「なんだ？ レバー叩くなんて珍しいじゃねえか」

隣のファイアードリフトに腰かけてそう言った俺に少し驚いたように純ちゃんは  
振り返る。

「リーくんかよ。こいつ、絶対設定1だけ？」

じゃあやめればいいのに。そう思ったがまあ気持ちにはわかるよ。昔のパチスロ回  
してると演出ひとつでノスタルジーに浸れるんだよな。大人になってゼニに余裕が  
できるとそういう部分に観戦料金を支払っている感覚にもなる。

だが純ちゃんは違った。ハマればハマるほどにレバーを強打している。こいつ天  
井バケだったら店に追い込みかけるんじゃないやねえかなと思うほどの強打だった。

「誰と来たのよ？ ひとりか？」

そう聞くと純ちゃんは反対の島を指さした。細いズボンにでかでかとブランドロ

ゴが描いてあるロンTを着た若造三人だった。

「なんだよ、しょうもないガキ連れてるなあ純ちゃんは」

冷やかしを入れた俺に純ちゃんは言った。

「甘いなりーくん、あいつら明王高梨の手下だぜ？　また金集めしてんだ。チエック入れちまってよ」

高梨と言えばリップルって仮想通貨に仕手を入れるみたいな与太話で何十億も集めて街からフケた伝説級の詐欺師だ。通り名が明王。詐欺師は自分で王様を名乗りがち。

タワーマンションからホテル暮らしになって、訴えられて飛んだと聞いていたんだけどな。

「マサキさんの紹介だよ。これは一山あるぜ？」

話を聞くと、デートクラブ屋のマサキさんは懲りずに櫻田に付きまとっているらしい。一発小突けばいくらか出てくるような詐欺師だから、小遣いを稼ぎたくなる気持ちもわからなくもない。

純ちゃんが引き連れてる小僧どもは、マサキさんが俺に黙テンで居座っていた櫻

田の住むマンションに押し掛けてきたんだそうだ。パツと見からして弱そうな小僧だったってのもあって、瞬間で蹴散らした純ちゃん。すると後になって高梨から連絡があったらしい。

高梨の言い分はこうだ。細パン小僧どもは櫻田にやられたが、金を集める力はある。いくらかでも取り返して太客に戻せば、もう一度金を引ける。それを高梨が運用すれば細パンも櫻田被害者も助かる——そんなよくある内容だった。

詐欺師はカモを取り合う、しかし上級の詐欺師はカモの漁師を取り合う。

この街ではよくある、そんな話。

「高梨の枝なんか触っていると事故るぜ？　俺は帰るけど間違っても巻き込むなよな」

嫌な予感がした俺は突き放し気味にそう諭していたが、純ちゃんは天井から旋風チャンスに突入して話が右から左って様子。

振り分けはほとんど単発だった気がするが、小僧どもを台の周りに呼び寄せて4号機時代の思い出を語り入れてご満悦の様子。

飽きてきた俺はそれを背中にしてノーマネーで店を出る。エレベーターは誰かの

吐瀉物でひどい臭いを醸し出していたから階段から降りることにした。本日はマイナス55万に、戦利品は煙草が二箱。ゼロサムゲームのこの街じゃ、そんなのは普通の事だがな。

\*

事務所に戻る帰り道、ゴミ袋ががさが動いていると思ったら中にネズミが入っていた。

袋を食い破ってネズミが自分から中に入ったのか、それとも誰かがネズミを捕まえて生きたままゴミ袋に入れて捨てたのか。検証するにはゴミ袋に穴が開いていないか確かめる必要があるが、よく考えたらそんな事はどうでもいい。不気味に動くゴミ袋を横目に俺は職安通りへと抜けた。

それにしてもだ。詐欺師をカタにハメようとする詐欺師に純ちゃんが肩入れしようとしている。金を商材にしたポンジ野郎の櫻田と、リップル詐欺師の高梨の件だ。この2人は詐欺師界限ではそれなりの存在で、太い客や手下の若い人間使って自

転車操業してるわけ。例えるなら鵜飼みたいなもん。そもそもこの話を持ってきた愛梨の周りだけでも櫻田からはまだ6000万以上も未回収だから、本気で取りに行くには鵜が飲み込んで吐き出した魚を何匹か戻させるって事だからな。

櫻田からかすめた銭を元手に高梨に仕事させるって発想は悪くはない。とはいえ、ついこないだ搾りカスまで締め上げた人間から、これ以上取り立てなんてできるものなのか。

「行きはよいよい帰りは怖い」

とはよく言ったもので、ゴールまでやっちまうと帰り道は相当に寒い。山登りに例えるなら六合目くらいまで行ったら記念撮影でもして家に帰ったほうがいい。あれ以上圧迫すると本気で筋の悪い所も出てくる。それくらい、櫻田は多方面から金を引き散らかしていたからな。

面倒事に巻き込まれた場合の対策をシミュレーションしながら歩いていると、事務所はもう目の前だった。部屋に入ると電気がつけっぱなし。最後に出たのは俺だから誰のせいでもない。

不細工に巻かれたスウィッチャースウィートのブランドが残っていたから、そい

つに火を灯す。微睡みながらこの日は眠りについた。

翌日、起きたのはしつこいバイブレーションのおかげ。目覚ましはかけない主義で寝たいだけ寝るタイプの俺だけど強制的に起きるのはだいたいこんなパターン。音で咄嗟に起こされるより振動で徐々にのほうが目覚めはだいぶマシンだ。

「リーくん出るの遅いよ。今からちよつとラトゥールの櫻田の部屋来れない？」

電話はマサキさんだった。

「嫌だよ、起きたばっかりだし。どうせ面倒事だろ？」

その通りだった。マサキさんは乱戦に巻き込まれている様子。というのも、純ちゃんのことを「よくわからないけどすごい人」と思い込んだ高梨の手下三人組が気を大きくして櫻田に返金の直訴をしに来たところに、面倒くさい債権者リスト一位の某広域指定暴力団関係者が乗り込んできたらしい。

「触るなって俺、言っただろ。状況もわからねえのに行きたくねえよ」

「それは来てくれたら説明するって。頼むよ、リーくん」

ほらな。深追いするところなるわけよ。

「純ちゃんはどうした？ そのガキらと昨日仲良く遊んでたけど」

「それが既読もつかないのよ、逆にリーくん知らない？」

またやりっぱなしの悪い癖が出ていやがる。マサキさんからの電話を切った俺は純ちゃんの携帯、LINE、テレグラムと片っ端から連絡を試みたが、確かに連絡がつかない。

こういう時は焦っても無駄。

マサキさんに「夕方までには顔出すよ」とメッセージを入れて携帯を放り出した。すぐに着信が入るがもちろん出ない。

見捨てるわけでもないんだけど、こういうトラブルは初動が大事な時とそうではない時がある。

状況が把握できていないのに焦って急行するより、遅れてでも全体像を掴んでから行ったほうがいい事もある。

そもそも高梨は厄ネタだからな。実を言えば、純ちゃんがこいつと絡んだ時から俺は心配だった。

あれは赤坂のインターコンチだったと思う。高梨が不良っぽい債権者に囲まれて拉致られそうになったところを、純ちゃんは一度助けていた。当時宗教的な盛り上

がりを見せていたリップルのコミュニティがあつて、飯の種を探しに潜入したら高梨の話術に乗せられて純ちゃんもリップルを全財産ぶん買ったんだそうだ。

一時期は何倍にもなったそうだが、結局はデカイ含み損を抱えるようになった。それでも高梨は何かに使えるんじゃないかって人間関係のレツは繋いでいたというよな記憶がある。

高梨が破綻してしばらくした後ヘルプの連絡があつて、それが件のインターコンチ。

「おまわりさん、大変です。ロビーで暴力団が暴れていて、一般市民が巻き添えになつています。刃物とか、持ってるかもしれない」

「警察の方かね。私は今、溜池のインターコンチにいるんだが、風体の悪い輩が揉め事を起こしてやる。周りにいる人間、女子供も区別なく引っぱたいているのだよ、早く助けに来てくれんかね」

純ちゃんが携帯を何台も使い声色を変えて警察に110番通報したら現場が揉みくちやになり、駆けつけた警官に不良が足止め食らつてる間に純ちゃんは刑事のフリして高梨を見事救出したらしい。こういう機転だけは効くんだからたいしたもんだよな。

だよな。

いくらかそれで握つたんだろう。単純な性格だからパブロフの犬じゃねえけどまたおこぼれに期待して後ろについていたのか。

高梨が街をフケた後、その下でマーケットと言えば聞こえはいいが、詐欺の金集めをしていた連中の一部が櫻田に流れたという事だろう。そいつらがマサキさんが居残りシノギをかけている櫻田のマンションに突入した。それをマサキさんは純ちゃんに投げたが、純ちゃんはなあなあにした、そういう流れ。昨日バカラで負けて裏スロでもすべつてから二人とは話していなかつたが、この線に間違いはない。

強欲が災厄を招くつていうこの街のテンプレートみてえな事象であつて本当にわかりやすい話だ。

部屋にいても落ち着かないから俺は外に出た。それでも一応ラトゥール新宿の方に歩き始める自分を優しいな、なんて思いつつ、やる事もないから小滝橋通りの丸亀製麺に立ち寄つてぶっかけうどんを注文する。

ちくわを念入りに細かくして麺と混ぜるのが俺のフェイバリット。多めにぶっか

けたネギ、ちくわの破片、それとうどんを混ぜていると純ちゃんからの電話が鳴った。

「おせえよお前、ちよつと五分待つてて、すぐ折り返すから」

俺がそういうと「緊急！ 緊急！ 今聞いて！」と純ちゃんは叫んでいたが俺は電話を切った。こういう時に焦ると泥沼にハマりかねないんだ。

うどんを胃に流し込んだ俺は店を出た。昨日ガジってきた煙草はまだ半分も残っている。そいつに火を点けて半分ほどを灰にしてから、俺は純ちゃんに電話をかけたんだ。

「今ちようどガード下あたり。とりあえず話聞くから出て来いよ」

常圓寺のお墓の裏の公園に、コンビニで買ったトクホのお茶を持ち込んで純ちゃんを待つ事にした。頭を過ったのは、さっき見た袋をかぶって不気味に動くネズミ。出口のない迷路でもがいているようで不吉にも程があるが、なるようにしかならない。クシャクシャになった箱からもう一本タバコを取り出し、火を点けた。

\*

待ち人來たる。普通こういう時は俺を見かけたら小走りで駆けつけるのが当然の礼儀だと思うが、純ちゃんは違った。どこかかったるそうに歩いて近づいてくる。

「あれ？ 俺の飲み物は？ なんでないのよ」

ピクニックに行くわけでもないのに相変わず危機感のないやつだ。純ちゃんはふてくされた顔で通りの自販機に行くと甘そうな紅茶を買ってきた。

「緊急って電話で騒いでいたのはなんだったんだよ？ マサキさんがかなりまずい状況だつてのに、ずいぶん呑気な動きしてるな」

「それがさあ、俺よく考えたんだよ。ほつとけばいいだけの話なんじゃないかなつて。俺、マサキさんとそこまで仲良くないかなつて」

同じ山を踏んだ人間をこうもあつさり切り捨てようとするとは、とんでもないやつだな。

確かに居座りして櫻田をいじくり続けたマサキさんは自業自得だ。ただ、あの日俺たちが切り取った金を広域指定暴力団に所属する先方が「自分のものだからこつちにつける」なんてごねたら、俺たちもどうせ探されるわけ。なら、早いうちに話

の折り合いをつけたほうがいい。

「おい、ポイ捨てするなよ」

「なんだよ。リーくんだってするだろ？ いちいちうるさいなあ」

ピリピリしているから、マナー以前に人のこういう一挙手一投足が気になって仕方がない。

確かに気乗りはしない。この様子だともうマサキさん締め上げられてるんだろかな。

「あともうひとつ心配な事があってさあ……」

純ちゃんが気まずそうにボソボソ言ってきた。聞けば、マサキさんに電話を代わられて相手が誰だかもよくわからないうちに、いつもの調子で吠えてしまったそう。

「今から道具握って行ってやるからよ。待っとけよ、馬鹿野郎」

ひとしきりカマした後には看板を出されたとの事。

「それ、先方さん怒ってるんじゃないやねえの？ 馬鹿だなあ本当に」

気分がますます重くなったところで現場に到着した。ラトウールはインターフォンがないから受付で行き先を言わないといけないんだけど、こんな用事でコンシエ

ルジュと話したくもない。

上にいる人間に降りてきてもらうか。マサキさんに電話をかけた。スピーカーからは知らない声。

「何時間も待たせやがって。使いのもん降ろすから待っとけ」

しばらくすると先日闇スロ屋で会った小僧三人組のうち一番ちびっこいのが降りてきた。白パン二号とでも言おうか。

「純さんおつかれさまです。マサキさん結構やられちゃって……」

「自分らは大丈夫なの？」

「僕らはまだ櫻田から一円も返ってきてきてないので。マサキさんは、今まで取った金をどこやったんだって詰められています」

まあ、そうなるよな。リングが木から落ちるくらい当たり前の流れだ。

エレベーターで43階まで上がるまでの間、どうやって切り抜けるかを考えていたが結局出たところ勝負するしかない。何せ、相手がどういう温度なのかわからない。玄関を開けると靴やサンダルが乱雑に並んでいた。白パン二号に導かれるままにリビングに入る。ヤクザというより日焼けした半グレ風が中央に陣取っている。

なるほどな。目立つのは得策ではない乗り込みなのに、男は蛍光色の短パンにTシャツから堂々と刺青を出していて、結構ぶっ飛んでいそう。こういうタイプは後からデコが来るとか気にしない直情型だ。

床に目を向けると指がクリームパンみたいに腫れたマサキさんが転がっていて、泣きそうな目でこちらを見てきた。たぶん、指を折られたんだらうな。

「事情がよくわからないんですが、こいつ何かしたんですか？」  
とぼけて自然なボールを投げてみた。

「なんだあ？ 櫻田に俺達が預けてた金、お前らが持つてつちまっただらうが。億って金預けていたのによ、こいつが700万ぼっちしかねえつつうから隠し場所聞いてたんだよ。そんなにすぐなくなるわけねえだらうが」

そうか、この人はあの日の俺達と同じだ。

わかる、わかるよ色黒の兄さん。俺達もあの日、素寒貧の櫻田の財布の中身や銀行口座を見て愕然としたもんな。俺はこれまでの経緯をわかりやすく、かつ櫻田がいかにも悪質かに重点を置きながら説明した。

「——というわけで。自分らも結構苦労したんです。その日の金はもう被害者の女

につけちゃってるし。こいつの規模になると金に色なんかないんだし、どれが誰の金なんかわからないじゃないですか」

「じゃあ俺にババ引かせるってわけか？ それにさっき啖呵切ってきたのいたよなあ？ お前か？」

純ちゃんが吠えちゃった件か。

「どこのどちらさんか、わからなかったのてつい……」

俺がそう言いかけたところで純ちゃんがマサキさんのところに駆け寄った。そして腕からアイスブルーのデイトナを剥がすと、純ちゃんは驚くべき一声を上げた。

「今日はどうか勘弁してください！ 櫻田からも手を引きますから。この時計、1000万くらいするんです！」

さっきまで痛みに苦しんでいたマサキさんが目を丸くして純ちゃんを見るものだから吹き出しそうになった。純ちゃんを「なんだかすごい人」と認識していたはずの白パン小僧三人組も引いたんじゃないかな。まさか他人の時計でケジメをつけるとは。

拍子抜けした色黒ヤクザだが、被害は億単位とあって当然すぐには引き下がらな

かったものの、「櫻田のガラさえあれば金はまた作れますから」とクロージングをしたら、ある程度は納得した様子。

「じゃあそういう事で、櫻田は置いていくんで。他のやつら連れて帰っちゃってもいいですかね？」

こんな場面で知り合った不良と連絡先の交換をしてもいい事なんてない。軽く会釈をして俺は仲間と小僧を連れてラトゥールを出た。

「純さん、こうなるとこないだ俺たちが払った手付けってどうなっちゃうんですか？」

後ろの方で白パンが不安そうにそうこぼしていた。

「うるせえ！ これでも安く済んだってわからねえのか！」

小競り合いを横目に、マサキさんは腕を押さえながらタクシーを止めて大久保病院へ向かった。応急処置をするためだ。

「だから言ったのによ。マサキさんもツラの皮厚いんだから」

「甘いなりーくん。あのデイトナ、スーパーコピーだから」

発車際にそう言い残して、マサキさんを乗せたタクシーは十二社通りの彼方に消えていった。

空を見上げると、街は夕暮れ。

場面が長く続いたせいで、昨日ガジった煙草はすっかり空になっていた。ついでライターも部屋に忘れてきたか。まあいい、そんな日もある。

\*

家に帰ってひと眠りしようかと思ったが、朝方まで賭場にいた翌日にこんな場面が続くとなかなか寝る気分にもならない。ドーパミンが過剰に分泌されたせいなのかはわからないが、日が暮れてからどうにも目が冴えてくる。

こんなときは思い出したように何か所かに電話をするんだ。

返せる当てがないのはわかっていても、思い出したら必ず電話をしないとけない債務者連中が何人かいる。

別に嫌がらせてわけじゃない。時間に関係なく「今日いくらか返せるか？」って電話で聞くんだ。業者でもない個人間の話だから催促するのに時間の縛りはない。

そんなときに、だ。

「ずっとジリ貧でお前どうするんだよ？」

なんて世間話を混ぜるとたまに面白い話を持ってくるやつがいる。顔だけは広いバカっているだろ。あんなのに返せない金を貸してやるのにも色々理由があるんだよな。

「もしかしたら来週返せるかもしれませんが、まとまった紹介料が入るかもしれないけど……」

どこかで聞いた事のあるような話だと思ったら、これも高梨のレツの連中からだった。

明王を自称する詐欺師の高梨。過去にリップルの高騰を的中させた伝説の投資家がまた大きな相場を仕掛ける。そこに乗られる枠があるから出資しないか？ そのうち掛け、首尾よく出資させれば紹介料が支払われる——そんな内容だったけど、典型的な詐欺話だよな。金入れる人間を紹介すると何割か入るみたいなスキームを誰が信じるんだって思うけど、まあ一定数いるんだよ。金ぶっこむのが。

しかしそうなるのだ。街をフケてから表立って金集めをしづらい高梨が矢面に立つはずもない。純ちゃんが連れていた手下の白バンドもがその役目を担ってるんじゃないか。そう思って電話をかけた。

「あいつらの名前？ リーくんガチャガチャにするから言いたくないよ。なんかあったわけじゃないだろ？」

「なんかあってからじゃ遅いだろ。俺たちは櫻田の件で他を出し抜いて金かつぱらってるの忘れんかって。あれとごちゃ混ぜになると面倒だぜ。まだ一緒だろ？」

「そうなんだけどさあ、こっちも困ってるのよ。まあいいや。ちょうど暇だし、あいつら、今から事務所に連れて行くよ」

連中を待っている間、やることもないから便所の掃除をした。厄介事に巻き込まれるのだってトイレの神様を粗末にしたせいかもしれないもんな。

シャツをまくってせっせと便器を磨く。誰のかわからない縮れた毛をきれいにトイレットペーパーにくるんで流したらもう完璧だ。ついでに芳香剤でも買ってきてもらえばよかったと思うていたら連中が到着した。

「まあ座れよ、あんちゃん達も今日は大変だったな。コーヒーでも飲むか？」

落ち着かせて話を聞き始める。

リーダー格の小僧は山里くんと言うらしい。ここ一、二年で副業やFXなんかのネタで釣った投資家、というと聞こえはいいが要は楽しんで儲けたって連中を案件元にパスするブローカーなんだそうだ。

最初は例の高梨の下で金集めをしていたが、相場に失敗してとんでもない負債を背負ってしまった、どうしようもなくなったところ櫻田と出会ったそう。当然そっちでも事故ったもんだから、山里はかなり気まずい状態に陥っていた。

「高梨さんがもう一回お金を集めてくれば、今度こそ成功するって言うので。櫻田さんには元本だけでもどうしても返してほしくて。それで純さんに手付金500万払ったんです」

ああ、純ちゃんに金つけちゃったのか。あの状態の櫻田から切り取るのは至難の業だってわかっていただろうに。当の本人は素知らぬ顔でスマホをいじり、麻雀のオンライン対戦をしている。

「純ちゃんに手付け払っちゃったのはわかるけど、さっきの不良見たろ？ 役職付きだったし、あっちに身柄取られちゃったのに回収するのは難しいんじゃないの」

「えっ、じゃあ手付けの払い損じゃないですか！」

それはそうなる。ただ、純ちゃんが何かすると俺まで白い目で見られる。いくらかだけでも拭いてやっておさらばしたほうがいい。そう思ってマサキさんも呼んでおいた。そろそろ着くはずだ。

待ち時間の間、山里がどうしてそんなにせっせと詐欺師に金を運んでいたのか聞いていたが、偽造の残高やらの騙しツールに目が眩んだというより、人として魅力を感じて信じてしまったようだった。

まあ詐欺師は人たらしよ。優しいし、自分で自分をも騙して虚構の人物を演じているから、一度信頼させたら多少のボロが出て人も人は離れない。

「俺も高梨好きだぜ？ あいついいやつだもんな、スーパー詐欺師だけど。リーチ」

純ちゃんも麻雀しながらそんな事を言っていた。そうこうするうちにマサキさんが到着した。

「痛てて、見てよこれ。はい、バルタン星人」

両手の人差し指から順に折られたらしく、ぐるぐる巻かれた包帯を誇らしげに見

せびらかしてきた。

一応お茶を出してやるが、マサキさんからサルベージして平たくするしかないと思っただ俺は説得に入る。

「実際にくらガメたのか知らないけど、個人プレーで結構握ったんだろ？ もう何も言わないからこいつらに300だけ渡してやれよ」

「なんですよ！ 指まで折られたし。俺だってリスク背負ってガジってたんだからあ。嫌だよ、返したくない！」

押し問答になりかけたところで純ちゃんが立ち上がった。

「マサキさん、俺がこれ知らないと思ってたのかよ。あんたこれでも儲かったはずだろうが」

スマホの画面にはマサキさんのデートクラブの在籍女性一覧が表示されていた。そこにはボカシが入っているものの、見るからに愛梨とわかるキャストが――。

「一緒の山踏んだってのに独り勝ちか？ コピー品のデイトナで機転利かせたのだった俺だろうが」

ソファアに帰りながらぼそつと「好きだったのに」と悲しそうに呟いていた純ちゃんの声を俺は聞き逃さなかった。

マサキさんはうなだれながら条件を飲んだ。山里らは帯を3つ受け取ると大人しく帰っていった。

「そんな落ち込むなよマサキさん、今日は俺が奢ってやるから」

「そうだよ。あんま拗ねるなよ」

マサキさんを真ん中にして、俺達はすっかり日の落ちた区役所通りを歩いてリビングに向かった。行く先は例の新店の闇スロ屋。野郎寿司の前に引き屋の佐野がいた。

「お疲れさん、ご新規一名連れて来たぞ」

「なんだよ！ 奢るってスロットかよ。俺の指見ろって」

意地悪だって愛情、そんな日もある。

俺は大花火、純ちゃんは一撃帝王、マサキさんはリール停止ごとに痛そうな顔をしながら裏物のジャグラーを悲しそうに打っていた。

\*

「イタっ、痛っ」

レバーを叩くたびにうめき声をあげながらマサキさんはジャグラーを順調にハメ

ていた。

上部のデータロボを見上げるともう900回転くらい。このチェリーバージョンは天井が1000ゲームくらいだった気がするからそろそろか。懐かしの小泉首相じゃないが痛みに耐えてよく頑張ったというところ。まあ単発だろうけどな。

大花火を打っていた俺は順調に二千枚くらい出していった。昔取った杵柄で、リプレイ外しの成功率が95%くらいあった影響も大きい。大花火において三連ドンちゃんて外しをするような男にはなりたくないという気持ちがある今の俺を作ったと言っても過言ではない。

そうこう言っているうちに山のハサミ目が外れてまたBIGを引いた。

「なあ見てくれよ。人生、山張って外れてもボーナスが待っているかもしれないぜ？ この出目がそいつを表しているよな」

ほろ酔いで気の利いた事を言っただけでも、純ちゃんは無視。

「リークンのそういうの興味ないからいいって。メモ帳にでも書いとけて」

こいつも最終天井付近まで引っ張られているだけあってなかなか機嫌が悪い。

「よし、やっと光った」

マサキさんに待望の天井。チェリーバージョンのジャグラーで天井から爆発したのはあまり見た事がなかったけど、結構伸びた。

最終的に俺とマサキさんが15万ほど浮いて、純ちゃんはトントンくらい。負けが常道の闇賭博屋としては上出来の部類だろう。

軽く寿司でもつまんで帰るかという事になり、野郎寿司に立ち寄る事にした。

「そういえばさ、マサキさん愛梨で儲かっているんじゃない？ あのユならかなりラック高いでしょ」

グラスビールを飲みながら純ちゃんがしゃべり始めた。

「うちのシステムって初回のマッチング料を取る形態でしょ。愛梨は速攻で太いパバができちゃって、もう新規取らないなんて言うから全然儲かってないのよ。ホームページの飾りってどこ？」

「パパ？ なんだよそいつ？ どんな仕事してる人？」

「投資家だったかなあ。パパ活って年でもない人だよ」

純ちゃんはなんだかんだ愛梨が気になっている様子。それを横目に俺は穴子の白

焼きをつつく。野郎寿司に来たらまずこれなんだ。

盛り上がる2人をよそに、俺はどこか冷めた頭で櫻田との出来事を反芻していた。よく考えると今回の件が尾を引くとなかなか具合が悪い。不良に渡したデイトナがパチ物だとバレたら目も当てられないし、高梨の部下の白パンどもから純ちゃんを手付金詐欺みたいな形で金をせしめているわけで、これも聞こえのいい話ではない。「どうしたんだよ、リー君。難しい顔して。具合悪いのか？」

異変に気づいた純ちゃんがそう聞いてきた。

「2人とも欲かいて深追いするとトラブルになるってわかったよな？ ちつとは勉強してくれよ」

「とは言ってもプラスには間違いないんだからいいじゃんか」

「さっきの300万とこの怪我は痛いけどまあいいよ」

図太いというか、どこかネジが外れているというか。この街で裏と表の境界線を行き来している人種の職業病なのかもしれない。

「忘れてた！ そういえば、すげえ熱い話があるんだ！」

そろそろ腹もふくれてきたという所で純ちゃんが思い出したかのように切り出してきた。

下町にN会っていう野球賭博で有名な組があるんだが、勝ちすぎて出禁になった伝説の野球賭博師のおじさんと知り合ったらしい。

「俺も最初は半信半疑だったんだぜ。でもおじさんが送ってくる予想を毎日メモしてたんだ。そしたら30戦してひとつしか外していないんだ。ほら、見てよこれ」

純ちゃんは興奮気味にiPhoneのメモ画面を見せてきた。

「マジかよ！ リーくん、みんなでこのおじさんに乗らないか？」

マサキさんも痛みを忘れて大興奮、指の包帯に醤油をこぼして汚らしい。

「まあ今回はあぶく銭も握ったしなあ。100万くらいなら乗っかってみるか」

「よし来た！ 俺は高梨軍団からもらった500万全部行くぜ？ マサキさんは？」

「純ちゃん、その手付金の300万返したの俺なんだぜ？ けどまあ、そうだな。あの300万取り返したいから三本行くか！」

修羅場を抜けた安堵感にアルコールの勢いも手伝って、俺たちはトントン拍子に野球賭博をすることに決めた。軍資金は合わせて900万。野球賭博師の予想に乗っかるだけだから、楽な話だ。

ところがだ。翌日から一試合100万ずつ張ってはみたものの、あれよあれよと六連敗。残り300万になってしまった。俺は遊び金程度だから気にも留めてなかったが、二人の顔色が悪い。緊急ミーティングと称して事務所にきたのが木曜日の昼間のことだった。

「どうなってるんだよこれ。純ちゃん話が違うよ!」

マサキさんは包帯でぐるぐる巻きの手で煙草をスパスパ器用に吸いながら純ちゃんを問い詰める。

「俺、嘘なんかついてないよ。本当にあの日まではずっと勝ってたんだって!」

このパターンはもしやあれかもしれない。思う事があり、俺は恐る恐る聞いてみた。

「おじさんの勝敗報告ってどのタイミングで聞いてたんだ?もしかして試合後に今日の結果報告みたいなメッセージで来てたんじゃねえよな?」

嫌な予感ほど当たるものだ。純ちゃんは黙り込んでしまった。

「もうひとつ。今回の胴ってそのおじさんを紹介してくれたところと繋がってたりしない?」

するとモジモジしながら純ちゃんはこう言うんだ。

「……する」

「……胴の人に……紹介してもらったんだ……うちなら受けれるからって」

ノミ屋が新規の客を引くためのフカシ話にまんまと乗せられたってわけだ。

「待てよ?これ、おじさんの逆張りすれば勝てるって事だろ?俺は諦めないからな!」

おかしくなつた純ちゃんはおじさんの巨人予想に逆らって阪神に残りの300万をフルベットした。結末は言わずともわかるだろう。

こんな事もあるよな。人生は山あり谷ありだ。

「人生、山張って外れてもポーンナスが待っているかもしれないぜ?」

先日の闇スロット屋で言ったセリフを、ここぞとばかりに言っただけはみた。二人は呆然として返事もくれなかった。

金は天下の回り物とはよく言ったものだと思いつつ、現実逃避がてら俺達は葉巻を裂き始めた。紫煙をくゆらせて窓の外を眺める。

明日がある。明日がある。明日があるさ。

\*

意気揚々と博打場に来た時ほど負けるもんなんだよな。

男たちの夢の島、それが平和島。しかしどうして俺がぶっこんだ時に1マークで転覆してくれるのか。ビニール袋かたまたまたフナでもプロペラに引っ掛かったのか。1号艇はキャビテーションを起こしてそれでおしまいよ。

こういう時に野次るオッサンらは多いんだけど、俺は叫びたい気持ちを隠してクールに振る舞うタイプ。言っちゃなんだが、大声を出しているオッサンらの舟券をまとめて足したより大きな金額を数秒で紙切れにしたわけ。だが俺は平静を装う。なぜなら今日は女連れだからだ。

「これがギャンブルの怖いところだよ、デキてただけどなあ。まあ見ているところは合っていた」

トムフォードのサングラスをクイツと持ち上げ、そんな事を呟いてみる。もちろん本心は目の前のオッサンらと同じ気持ちだが、今日はそういう温度は見せられない

い。

女連れと言っても別にデートというわけでもない。きっかけは件のホステス、愛梨。あいつがマサキさんの店で知り合った金持ちのパパがいて、そいつが俺に相談したいらしく、呼び出されたんだ。

用件は投資詐欺の調査という話だった。知り合いの色恋関係から入ってくる話に碌なものはないし、当然乗り気じゃなかった。

そのへんは愛梨も心得たもん。わざわざインスタグラムを見せてきて、  
「この子知ってます？ リーさんの事よくバーで見るんだって。この子も騙されちゃって、よければ一緒に話を聞いてほしくて」

なるほど、かわいいじゃねえか。アプリの加工技術が発達しようと、どうやっても元々のポテンシャルは高い。そんな容姿だった。

「この女とお前のパパがどうして同じのに引っかかるんだよ？」

「パパじゃないってば。お金だって私が欲しいって言うてるんじゃないかって、勝手にくれるだけ」

「だからそれをパパつつうんだろうが。そのバーキンも300くらいするだろ？」

デカいの釣りあげたなあ、お前も」

「この話はもうおしまい。とにかく流れを説明させてください」

愛梨によると、二人が引っかけかけた詐欺師は六本木のシヨークラブで毎晩のように飲み散らかしていたらしい。愛梨のパパもアフターでよくそのクラブに行っていたようで、席が近くなった際に軽い挨拶から始まり、連絡先を交換するようになったという流れだった。

一方で女は六本木にあるFというクラブで詐欺師に指名されていた。アフターでよくそのシヨークラブへと付き添っていたらしい。いつも豪快に金を使い、チップも大盤振る舞いしているその詐欺師を「本物」と信じてしまったのが不運の始まりだったというわけ。

ネタはよくある単純なポンジだった。必ず上がる仮想通貨があって、そこに投資すれば確実に儲かる。ただ、機密保持のため銘柄は教えられない。自分に預けてもらえれば——というシナリオだ。

詐欺師はまだ若いハーフの男で木口クリスピーノという妙ちくりんな名前のやつだった。

こんなの信じる方がどうかしていると思うだろうが、クリスピーノがハイブランドで着飾り、湯水のように金を使う姿を見るだけでコロツと騙される奴は案外多い。まさかこんな金持ちがわざわざ自分をハメるはずがない、と信じ込ませる典型的な手口。

「ハーゲンダッツみてえな名前しやがって。なんか腹立ってきたから相談乗ってやるよ」

「本当ですか？　じゃあ和彦さんとルイを呼んで席作りますね！」

そんな流れで今日。品川のプリンスホテルまで呼び出されたというわけ。少し遅れて到着するとすでに三人はテーブルにいて、軽く会釈をしてから席についた。

和彦さんはパパ活なんかしている割には若くてすらっとした優男だった。ルイはインスタグラムで見た通りの美人、内角高めのストライクってところだ。助けてやってもいい、そんな気持ちになった。

最近のヤマと比べると被害総額はそう大きくない。和彦さんが二千万にルイが三百万、話を聞いている分にはまだ行ったり来たり金のクリスピーノの手元を通過する事も多いようだった。

「これ見てください。今日もストーリーーズで時計買つてるところ、アップしてるんです」

ルイのスマホには詐欺師がよく行く銀座の時計屋でパテックフィリップを買っておどけるクリスピーの姿があった。

「債権者向けのポーズかもしれないぜ？ 僕は余裕ありますよって見せ方しておけば多少遅れたくらいで追及もされにくくなるだろ」

「僕なんかLINEの返信も三日に一度ですよ？ 返すものも返さず高い買い物するなんて……」

和彦さんは怒り心頭という様子だが、この人も脇が甘いよな。愛梨に渡している金なんかも考えたと余裕もありそうだし、よいカモにされてしまったのだろう。

「とにかく調べてみますよ。LINEでグループでも作って、そこで情報共有していきますから」

伝聞だけで相手の懐を判断するのは悪手でしかない。まずはクリスピーの下調べから始める事で解散となるはずだったんだが、ここからがまさかの事態。

「この後、どこか行くんですか？」  
タクシー乗り場で和彦さんを見送った愛梨にこう聞かれたんだ。

「品川まで来たし、平和島競艇でも寄って帰るよ。安心しろ、仕事はちゃんとしておくから」

すると暇だから私たちも付いて行っていいかとの事。これはルイを気に入った俺を見越しての、愛梨からのスルーパスだったのかもしれない。賭場に似合わない夜の女二人連れで競艇観戦している謎の男は、こうした経緯で誕生した。

財布には十万と少し。次はしっかりデカいのを取ってやろうと展示航走を集中して眺めている俺は、ルイの目にはどう映っていたのか。

「口に合うか知らねえけど、これ食ってみるよ」

おおこしの牛もつ煮込みライスを二人に振舞うと男の勝負飯の味にまんざらでもない様子だ。

初めてのボートレースに興奮した様子のルイは、あれはなに？ これはなに？ とやたらと話しかけてくる。俺の感覚だとなんだか一発やれてもおかしくないような雰囲気だ。

次のレースも新田選手のセンターまくりで買っていた舟券が粉碎されて財布は空

になってしまったが、別に今日はいい。綺麗な姉ちゃんとの距離を縮めるのにいくらかゼニを使っちゃったってだけよ。

「もう、リーさん口についちやってますよ」

ソフトクリームを食べていた俺の口元を、そっとハンカチで拭うルイ。

パスはすっかり受け取ったぜ？ そんな視線を愛梨に送った頃にはすっかり日が暮れていた。

日没と同時に灯されたナイター照明と大時計、そして背後のビル群とのグラデーシオンは、美しく切り取られて翌日にルイのインスタグラムにアップされていた。

\*

珍しく早起きしたものの、どうにも寝覚めが悪い。

愛梨とルイを連れて行った昨日の平和島。結局のところボートで勝てずに財布はカラになった俺だったが、悪くない時間だった。紳士に解散した俺は事務所に戻ると相談を受けた件の下調べにさっそく取り掛かったんだ。

そんなに急を要する案件でもなかったけど、ルイを困らせてる詐欺師がこの街のどこかで粋がってると思ったら仕事に熱も入るよな。

コンビニで塩辛を買ってきて、そいつをアテに年寄りくさい飲み方をしながら、いつもは億劫に感じる調べものを鼻歌まじりに進めていった。

ただ、そうこうしているうちに寝落ちしたようで、山盛りの灰皿と飲みかけの発泡酒の嫌な匂いと同時にそれとは真逆の爽やかな朝日で目を覚ましたってわけ。

件の詐欺師の名は、木口クリスピーノ。回収するにはこいつの懐事情をなるべく正確に把握しておきたいところ。今回の依頼は2300万円ほどだから、クリスピーノが一仕事でもして潤った瞬間を狙い打てれば、回収できる確率は格段に高まる。だが、クリスピーノを近しい距離で知っている友人が簡単には見つからない。てめえの物なのか借り物なのかわからないブランド品自慢をしているインスタグラムを見ながら、とりあえず交友関係の目星だけはつけていたようだが、汚いメモ書きが机の上に散らかっているだけ。昨晚のリサーチではこれといった成果を見つけれなかったようだ。

広いようできて案外狭かったりするものが東京の詐欺師の世界で、SNSの検索窓を叩けば共通の知り合いの一人や二人、すぐに見つかると踏んでいたんだが、さすがに甘かったか。バイトにコーヒーでも淹れさせたいところだが、生憎今日は休み。買い置きの缶コーヒーを飲みながら今後の方針を考えることにする。

クリスピーノを直接知る人間が近くにいないとなると、ヤツの懷事情を外から調べるのは案外難しそうだ。

インターネット上に痕跡は残されているものの、そのほとんどがサッカー少年だった時のものだし、Facebookで地元の友達にコンタクトを取っても「今はもう付き合いがない」という声ばかりだった。野郎はサッカー選手としてはある程度結果を残していて、中学生のとき、地元のサッカーリーグで得点王に輝いたなんて記事もあった。

ただ昔から虚言癖の傾向は強く、地元での評判はかなり悪かった。簡単に言えば嫌われ者つてとこだな。採め事を起こすと知り合いでもないヤクザの看板を出し、それが捲れてさらに追い詰められるくらいには頭の悪いヤツだったようだ。地元に

居づらくなつて東京に出てから詐欺師デビューしたクチなんだろうな。

これはもう、一か八かで本人をとっ捕まえるか。頭は悪そうだから、こいつがノコノコ来そうな場面を組んでハメ呼びしちやえば話は早い。

当然リスクもある。接触すると警戒レベルが上がるのは間違いないわけで、その場で回収できればいいけど滑った場合はクリスピーノがどこかへフケてしまう可能性もある。

そうなると状況はアクションを起こす前より悪化するわけ。ここは依頼人に方針の確認をするべきなんだ。

さて、ルイに連絡する正当な理由ができてしまった。

シゴトの連絡をするだけなのに妙に緊張する俺だったが、それはそれ、これはこれ。用件を簡潔に切り出した。

「クリスピーノの件、俺の好きなようにやってみていいか？ ミスしたらルイの店でシャンパンでも並べるからさ」

「そんな。もう諦め半分だしお任せでいいです。それにお店でシャンパンなんて……それより、またみんなでポートレースに行きたいなあ」

声がかわいいんだよな。声がよ。

後はもう一人の依頼人、和彦さんの意見か。ハメ呼びするにしても誰の線からアタックしたほうがいいかも相談しないといけない。

面倒だし、こっちはメッセージでいいや。昨日インスタールさせておいた和彦さんのSIGNALに、クリスピーノを呼び出すのに適任の人間はいないかと送信すると、一人アリな人材がいるという。和彦の指示でクリスピーノを信じたフリをしている社長仲間だ。そいつがちょうど投資話を振られているらしい。

「天皇陛下の資産を運用する凄腕トレーダーに預ける話で、元本保証、月利33%だそうです」

あまりの頭の悪さに言葉を失う。自転車操業も末期で片輪走行しているような詐欺野郎が言いそうな話ではあるが。

「そのファンドの枠が残り1億で、もうすぐ埋まりそうって話です」

これも安直すぎる煽り。こんな与太話でも引っかかるヤツがいるってことなんだろうな。

「さっそく契約したいと連絡して、会える状況を作ってください。現金を用意するって匂わせたら飛んでくるはず」

和彦さんの社長仲間にも指示を飛ばすと、案の定、クリスピーノは針にかかった。

後先考えないポンジ小僧に知能の高いヤツは、基本的に存在しない。末期になると今をしのぐ事しか考えられないから、疑念を持つより先に自転車を漕ぐことを優先させてしまう。それが性ってやつだ。

呼び出しは明日。

こういうのは場所も肝心で、いかにバカとはいえ相手を舐めてはいけない。少しでもトラップを疑われないようにあえて人目のあるチェーン系喫茶店を指定してもらった。

とはいえ、この喫茶店を指定したのにも当然俺たちの思惑がある。この店、同じフロアに別会社が運営する貸会議室があるんだ。

喫茶店の出入り口からその会議室までは歩いて5秒。そのうえ、喫茶店の入り口にはスモークがかかっている。つまり入り口で待ち合わせをして多少強引な方法を取れば、人目に触れずに標的を貸会議室に連れ込めるってわけ。ここに誘い込めさえすれば、いつもの俺たちの「やり方」でヤツを問い詰めることができるんだ。

日取りも決まったし、クリスピーノが暴れた場合も想定して仲間も呼んでおくかなにせ、得点王だからな。中学生リーグだけだ。

純ちゃんにマサキさん、ついでにルイが働くF店の常連でもある引き屋の佐野でも呼んでおくか。そう考えながら、純ちゃんのケータイを俺は鳴らす。

「よお、明日、簡単な見張りあるぞ。いくらかになるかもしれないから体空けてよ」

「リーくん、本物の無職を舐めてんのかよ？ 空いてるに決まってるだろ」

無職に本物も偽物もないだろう。そう言いかけた俺だが今回は物を頼む立場だ。

喉から出かけた言葉をぬるくなった缶コーヒード飲み込んだ。

\*

クリスピーノ捕獲作戦当日。相手がガキだからといって油断しないのが俺たちのスタイルだけに、貸会議室には結構な人数が集合していた。

俺に純ちゃんとマサキさん。引き屋の佐野に依頼人二人と仕掛け人が一名。紅一

点のルイは今日もオレンジ系の韓国メイクがよく似合っている。

「こんなにくさん集まってくれてるなんて。なんかドラマみたいでドキドキします。チームですね、私たち！」

なんだかな。女がいると現場が締まらないような気がするが、かわいいから許した。とりあえずクリスピーノをこの部屋にぶっこんでからガチガチに問い詰めるワゴンチャンス作戦だけに、事前の打ち合わせはたいして必要ではない。

来るか来ないか、取り逃がしはしないか。現状の焦点はそこだけ。

もしもに備えて店前の道路にも佐野とマサキさんを配置してターゲットを待つ。

約束の時間きっかりに、奴は姿を見せた。衆人環視のチェーン系喫茶店だけあって、警戒心もなくてこのこと現れたクリスピーノ。

事前の打ち合わせ通りに仕掛け人が「別部屋に1億置いてある」と誘導する。警戒心もなくてこのことついてくるクリスピーノ。

扉を開けた途端、潜んでいた純ちゃんがいきなり飛びかかって袋をかぶせる。さすがに警戒心を持ってあたふたするクリスピーノ。

手際よくシベリアン・ヒッチ結びの変化型で手を縛った後、袋越しにクリスピーノを問い質した。

「なあ木口、要件わかるよな？ てめえが引き散らかしたゼニの件だよ」

「わかるよなあ！ なあ！」

ゼロヨンのレースでもしているかのように俺たちのエンジンはすぐにレッドゾーンに入った。この展開ならクリスピーノがパニックになっているうちに勢いですべてを吐かせてしまう作戦がいい。

こういう時は2つのパターンがある。

・ A 投資は自己責任と開き直るやつ

・ B 非を認めるは認めるが時間稼ぎをするやつ

クリスピーノは後者だった。

「お金はすぐ返します。ちよつと先方からの入金がないだけで……。連絡が遅くなつたのは本当にすいません、謝ります」

「先方ってなんだよてめえ、ひとり芝居だろうがこのクソガキ」

「本当なんです。今日もこの後集金があって、リッツ・カールトンにパートナーが

いて。取りに行かせていただければ……。すぐに……」

なんだこいつは。取っ捕まったらすぐに返すタイプのまだ金が回っている詐欺師なのか？ こんな簡単に事が解決するなんてあるのだろうか。

「リーくん、こいつ被害者が誰かもまだ言っていないのに誰に金返すつもりなんだろうね」

表通りの見張りから戻ったマサキさんがにやにやしながら耳打ちしてきた。

確かにその通り。相当やってるな、これは。

詐欺師あるあるで、誰からいくらやらかしたのかわからなくなっているパターンだ。櫻田なんかは被害額すべてを把握した上で言い訳を考えてくる珍しいやつだったがこいつはやはりまだ若い。

とにかく返す、返させてくださいと連呼していた。

「なあ小僧、ちよつと落ち着けよ。水でも飲めって」

純ちゃんはそう言うのと紙袋を少し破いて、クリスピーノの頭に南アルプスの天然水をどぼどぼと流し込んでいる。

袋の切れ目から怯えた目が覗く。なるほど、ガキのわりに随分濁っていやがる。

「和彦さんとFのルイだよ。本当に2300万、今日返せるのかよ？ 怪しいなあ、お前」

「和彦さん！ 和彦さんもいるんですか？ 話させてください！」

言い訳でも並べたいのか、依頼人と話をさせてくれと懇願してくるから、そうしてみる事にした。依頼人がここにいると認識されるとデメリットもあるが、さすがに警察に走りはしないだろう。

「僕だって、僕だってこんな荒っぽい事したくなかったんだよ。だけどクリスくん連絡も取れなくなっちゃったから……」

和彦さんも初めてであろうこの状況に困惑しながら、要所要所でもりつつ対話をし始めた。

「ほら、前に話したじゃないですか？ 僕の資金を運用してくれている静岡のパートナーさんの話、和彦さんなら信じてくれますよね？ 本当に今日集金あるんです！ そしたらすぐに返せますから。この袋、外してください！」

「そういう人がいる話は聞いた事あるけど、僕はその方とクリス君のお金のやり取りまでは知りませんよ」

どうする？ とりあえず返す気は見せているものの、その場しのぎの嘘でつない

でいるだけのよう気もする。

とはいえ、このまま覆面状態のこいつとにらみ合いをしても何も進みはしない。一度話を聞いてみるか。

素直すぎて怪しさ百二十点満点だったが、入口を警戒しながら捕縛からの解放をした。

「まあちよつと落ち着けよ。クリスピーノ、お前さ。いきなりでテンパったと思うけど、バックレてたらいづれこうなるって考えなかったのか？」

「いや！ あの！ 本当にバックレるとかじゃなくて。予定がずれていただけなんです！ 今、僕すごく調子がいいし、こういうトラブルもう嫌なので今日中に返しちやいます！」

嘘くさいな、こいつ。なんてのはその場の誰もが思っていた事だが、ここまで自信満々に今すぐ返すと言うのなら、リッツ・カールトンで行われる集金に同行してみろしかないか。

「リーくん、こいつ移動の隙に逃げるつもりだぜ？」

マサキさんはそう耳打ちするが人数的には簡単に逃げ切れる状況ではない。

大声を出して通行人に警察を呼んでもらって揉みくちやにするか、ホテルで暴れて籠城するかって線も当然あるんだけど、仮に今から一億の集金があるってのがマジなら千載一遇のチャンス逃すことにもなる。

そのパートナーとやらをこっちに呼べないのかという話をクリスピーノに何度しても、そこは徹底的に拒否。パートナーという人間も後ろめたい金をいじくっているから待ち合わせ場所を変更すると警戒して来なくなるかもしれない。イコール今日返済が出来なくなってしまうというのがクリスピーノの言い分だった。

仕方ない。じゃあ行ってみるか。方針が決定するまでの時間は煙草を十本吸うくらいの間。悩んだがここは当初の予定通り、一か八かの出たとこ勝負を試してみるか。クリスピーノが逃げられないよう、腕を嚴重にロックしながら取り囲む。純ちゃんが表通りに回してきた車に俺たちは乗り込んだ。

\*

六本木の高級ホテルに到着した俺たちは、クリスピーノにパートナーとやらを呼び出させた。

待ち合わせ場所の45階のラウンジにはジャジーなピアノの生演奏が響いている。贅が尽くされた空間は、身なりの良さそうな男女で溢れかえっている。その中でポロジ詐欺師を取り囲む俺たちは明らかに異質な存在に見えるだろう。

エレベーターホールに佐野とマサキさんを配置。俺と純ちゃんはラウンジの離れた席について、パートナーとやらを迎えるために一人座らせたクリスピーノから視線を外さない。

「こっから先は俺たちでやるんで、外で待っていてください」

ルイと和彦さんと仕掛け人の社長には荒っぽい事になるケースを考えて外で待っていてもらう事にした。

しばらくするとクリスピーノの席に近づいてくる男たちが見える。しかしこれがまた早くも雲行きが怪しい。

拳まで刺青が入った男を先頭に3人の男がラウンジに入ってくる。まだ若い。どう考えてもまともな投資家ではないだろうな。

「あれがクリスピーノのパートナーってやつか？ 野郎、どういふつもりなんだ？」

純ちゃんは早くも戦闘モードだが、ここは見守るしかない。焦っても仕方がないし、せっかくだからと景気づけにマティーニを注文した。クリスピーノの話がガセだったらこれから待っているのはトラブル、本当に集金できれば万馬券つてところだな。

しかし、そううまくいくワケもないんだよな。しばらくするとクリスピーノの席は異様な空気に包まれているのが遠くからでも観察されるようになった。パートナーとやらは立ち上がったたり、グラスをテーブルに叩きついたり。まあ険悪な雰囲気だ。

「リーくん、あれ揉めてるな。うん、普通に揉めてる」

「これはババ引いたっぽいなあ」

いきり立った男たちがクリスピーノを責め立てる。そのうち、ラウンジの外に連れていかれそうな雰囲気。こうなるとさすがに声をかけないとまずいか。

「お兄さん隣いい？俺たちもそいつに用あるんだけど。1億こいつに返すんじゃないかったの？」

刺青男に向かってストレートにぶつけた。すると男は顔を歪めてクリスピーノを一瞥すると、俺たちに事情を説明し始めた。

聞けば、話は真逆だった。1億返すと言われてここに来たとの事。目の前のクリスピーノは言い訳に終始しているが、タダで済むはずがない。

債権者同士をぶつけて現場を混沌とさせ、その騒乱の中で隙あらば逃げようって魂胆だったんだろうな。

クリスピーノの腹が見えた俺はリーダー格と目した拳まで刺青が入った男と対話を試みるが、これがまたエキサイトしてなかなか引かない。

「コイツだけは許せねえ。悪いけど俺らが連れて行くんで」  
ガラは自分たちが持ち帰ると主張してくる始末だ。

債権者同士がいか所に集まると、誰もが人より先に自分の金を回収したくなるのは当たり前話であって、別の債権者とは利益相反の関係になる。

まるで蠱毒の壺と化したラウンジに、男たちの怒号が響く。誰の毒が一番強いかを競い合うかのように毒虫たちが蠢いている。

高級ホテルの静かなラウンジは一転して修羅場になった。

それでもピアノを演奏する男性は鍵盤を叩く指を止めない。この混沌の中でも一切の狂いなくメロディを奏で続けている。

これぞプロだな。俺もかくありたいものだと思っただ。

「ねえ、聞いてますか？ 俺の話。とにかくうちの被害額も大きいんだからこいつ連れて帰らせてもらいますよ」

音色に気を取られていると、刺青男は静かな声色だがはっきりと俺に圧をかけてきた。さあ掛け合いの始まりだ。

「いやだからさあ、おたくが本当に金をこいつに貸しているかなんてこつちにはわからねえじゃん。クリスピーノを奪還しに来たグルかもって考えたら、ガラは渡せないって。普通そう考えるでしょ？」

「なんだって？ 疑ってるって事？ じゃあこの写真見てくださいよ。ほら、こいつのサイン付きの借用書」

「だからさあ、このクラスの詐欺師になるとそれすら仕込みの可能性だってあるだろ？ 後から来たんだから引くならそつちが引いとけよ」

純ちゃんと男がヒートアップしている中、クリスピーノは一応怯えた表情をしつつも腹の中はどう考えていたのか。目は死んでいない。逃げるチャンスを窺っているようにも思えた。

るようにも思えた。

そうこうしているうちに、この異様な雰囲気は眉をひそめた一般客がホテル側にクレームを入れたのだろう。俺たちはボーイから、

「お客様の迷惑になるから出て行ってくれ」

と至極真つ当な注意を受けた。そろそろ落し所を見つけないと、クリスピーノの迷惑通りになっちまう。不本意だが、俺は刺青野郎にこんな提案を持ち掛けた。

「じゃあこうしよう。俺たちはこいつの身柄は渡せない。お兄さんらもそうなんだろ？ 場所はこつちで用意するから一緒に移動しようぜ。それしかなかったか？」

男たちもこれには洩々了承していざ移動しようとなったが、クリスピーノが席を動かさず動かない。

「おいおい、何やってんだお前。迷惑だからうちの事務所で話すぞ。早く立てて」

「クリスピーノ、お前が俺をここに呼んだんだろ？ とにかくこの人らの所に行つて話すしかねえじゃねえかよ」

男もそう捲し立てるがクリスピーノからすればここが正念場。テコでも椅子から

剥がれないといった様子だ。

仕方なく純ちゃんが腕を持って立たせるが今度はフロアの隅の柱にしがみついて動かない。

「行きたくないです！ お金は、お金は……返しますって！」

半狂乱になったクリスピーノの声が鍵盤の音色に混ざってフロアはさらなる混沌を極めていた。

そろそろ警察を呼ばれるんじゃないか——先に対処したほうがいいと思った俺はボーイに、

「ラチあかないので迷惑がかからないようにコイツ、担いで持っていきますね」

と無茶な相談をしたところ、これがまさかのOKだった。

「早急に出て行っていただきたい」  
とだけ告げられた。

高級ホテルは逆の意味ですごい。パトカーが押しかけることで生じるイメージダウンより、連れ去りしてでも他のお客さんに迷惑をかけないようにしたほうがいいという判断だったのだろう。

「ぐはっ」

柱の陰でクリスピーノに強烈なボディを入れて静かにさせてから、俺たちはエレベーターホールへと向かった。

\*

「キョロキョロしやがって。ようクリス、お前まだ逃げようとか考えてるんじゃないだろうな」

純ちゃんが言い放った言葉はおそらく凶星だった。六本木の中心地にそびえ立つ高級ホテルのラウンジ。エレベーターが来るまでの間も、周囲の隙を窺って逃走しようとしていたと思う。

それは左腕担当の俺だけではなく、右側の「バッテリー先の男」も筋肉のこわばりから十分に理解していただろう。

青ざめたクリスピーノを四方から取り囲むようにしてエレベーターに乗り込む。

一階に差し掛かる頃、俺たちはやっとお互いの名前を名乗った。

片桐という名前らしい。

クリスピーノとは例によって六本木のショークラブで知り合ったとの事だが、片桐の場合は別にコイツの与太話を信用して金を預けたわけでもなく、ポンジとわかりつつも自分なら切り取れると踏んで金を投げていたとの事。

今までも支払いが滞るたびに脅してすかして、何回か資金を回転させてきたがそこはやはり自転車操業。クリスピーノは片桐に支払う金にも困っているようで、俺たちをぶつけたというわけだ。

「よう、クリス。絶体絶命だな。お前、天皇陛下の資産運用してるんだろ？ピンチを助けに自衛隊でも出張ってくるのかな」

純ちゃんが軽口を叩いたそのとき、やつが動いた。決死の抵抗に打って出たんだ。「僕をどこに連れていくつもりなんですかあ！嫌だ嫌だ嫌だあ！」

駐車場にクリスピーノの絶叫が響き渡る。

車に積まれたらもう終わり——ライフゲージにリーチがかかっているとコイツは肌で感じただろうから、往生際も悪くなるというものだ。

俺たちは金の奪還が最優先だし間違っても殺すことなんてない。こんなこまい案件で刑事事件になるのも勘弁だから、本音では緩やかな着地を希望していた。

ただ、確かにそういう温度だけは全力で出していた。

「自分で歩きますって！おろしてください！僕をおろしてください！」

「だめだよ、てめえさつきダッシュしようとしただろうが」

半狂乱で暴れだすクリスピーノ。仕方ないので四肢を皆で担ぎ上げ、胴上げのよな状態で車まで連れて行こうとしたんだが、それでも体を急激にエビ反ってみたい、伸ばしてみたり。どうにか地面に降りようとしやがる。

「お前、落ち着けて。人目もあるだろうが」

お試しで一度降ろしてみたら、やっぱり走ろうとする。

サッカーをやっていただけあって、右にダッシュしようと見せかけてからの左、からのやっぱり右みたいな華麗なフェイントを仕掛けて来たが、純ちゃんの足払いが綺麗に入って転倒。

地を這いつくばるクリスピーノを多勢に無勢で取り囲み、強引に車に乗り込ませる。警備員さんに見られたが、まさかの注意なし。酔っぱらいの団だとは思わないうだらうから、本当に出て行ってほしかったホテル側からなんらかの指示があったのか。

車には片桐サイドから一人乗って、俺たちはやっと港区を出られることになった。クリスピーノは後部座席でサンドイッチにされて、しなびたレタスみたいに落ち込んだ顔をしてやがる。

「おいよお、今どんな気持ちだ？ さっきのフェイントが決まったら、どこに逃げるつもりだったんだ？ あのロシアンルーレットはなかなかだったぜ。俺には通用しないけど」

「純ちゃんはレタス野郎にマウントを取るよう語りかけていたが、それを言うならマルセイユルーレットだろう。指摘しようと思ったが、空気を読んでやめてあげた。そもそも馬鹿が多いから、間違いにも誰も気づいていない。」

車の移動先は、知り合いの格闘技ジムだった。もうたぐさんの防犯カメラに写ってしまった以上、いつものカラオケに連れ込むのも寒い。

それと今回は謎のバッテリー先までいるから俺の事務所に連れ込むわけにもいかない。仕方なしに決めた緊急避難先だった。

ようやく人目を気にせず詐欺師と向き合える空間にたどり着いた。ここまで来ればあとはもう詰めるだけ詰めて、有り金がどれだけ残っているかという話だ。

が、ここでひとつトラブルが起こる。

「いい加減なこと抜かしやがって！ お前だけは許さねえ！」

突如激昂した片桐がフルスイングでクリスピーノをぶっ飛ばしてしまったんだよな。

原因はマサキさんのささやきだ。

「片桐さん、片桐さん。クリスピーノがあなたのこと、冷たいのいつてるポン中つて言っていましたよ」

親指で注射器を押す仕草を添えて片桐に本当は聞いてもない話をチンコロしたんだ。

まあ凶星だったんだろうな。カッとなった片桐はクリスピーノの横っ面に拳をめり込ませたもんだから、お寒い話だ。

個室に入れて開幕。これは悪手ではない。監禁傷害が付きかねない事案になっ

てしまう。

片桐は別グループではある。しかしドアは閉じられていて俺達も同じ空間にいるわけよ。

「警察に走られたら寒いな」

純ちゃんと目を合わせた時、同じ事を考えていたのが表情を見てよくわかった。

しかし、それを察知されてはクリスピーノに強気に出られてしまうし、これはもう仕方ないか。競艇のスタートさながら、ここで勝負を決めるとばかりに強気に握りこんでいくしかない。

片桐の鉄拳制裁は確かにフライングだったが、この業界でそれに対するペナルティと言えばデコカケツが出てくるかではないわけで、まだどうなるかわからない以上は引いた方が負けだ。

「なあ、クリス。一応これ書いておけよ」

思案を巡らせていると、純ちゃんがクリスピーノに紙とペンを差しだして、何かを書かせようとしている。

「ほらこれ。この文章と同じようにお前の字で書こうな。日付も忘れずに入れるん

だぞ」

画面には「スパーリング同意書」と書いてあった。

「リーくん、俺これでセーフになった事あるんだ。大丈夫っしょ」

にやにやししながら純ちゃんは俺に耳打ちしてきたが、どう考えても強要して書かせたように見えるこの紙切れに本当に価値があるのだろうか。

片桐はクリスピーノにiPhoneの画面ロックを解除させてLINEやSMSをチェックし始め、マサキさんはバッグの中身を物色中。

クリスピーノが震えた手で同意書を書き写している横で、純ちゃんは興味深そうにパンチングボールで遊んでいた。

この稀に見る異空間で吸う煙草は、なぜだか青春の味がしたんだ。

\*

思いつきでポンジに手を染めるようなタイプのバカ、それが木口クリスピーノ。悪いことをしているって自覚がまるでないんだろうな。投資話の内容が嘘でも、

資金繰りが自転車操業でも、その危うい車輪が回り続けている間は「自分は詐欺をしている」という自覚が一切ない。

だいたい計画的にやるなら証拠を残さないよう、通信アプリひとつにしても工夫をするものだ。だがこいつにはそれすらない。堂々とLINEで各方面と連絡を取っていたのもその証左だろう。

クリスピーノのLINEは宝の山だった。女とのくだらないやり取りから被害者らしき連中とのやり取りまですべてのメッセージをていねいに確認していくと、驚くべき事実がわかった。

「なあ、お前さ。もしかして金の管理、家族にやらせてんの？ このママってこれ……母親か？」

この数時間、クリスピーノの安否を心配するようにメッセージを連打してくる相手のアカウントには「ママ」と書いてある。

『大丈夫？クリ、ちゃんと集金できたの？』

『クリスが金持ちすぎて狙ってる悪いやつもいるから本当に気を付けてね！』

『どうかな？もう集金終わった？ママ心配だよ』

『気付いたらすぐ連絡してー!!』

こんなメッセージが雪崩のように打たれてくる。既読をつけるとすぐに「ママ」からの着信が入った。

「打ち合わせ中だからすぐ折り返すって言え」

純ちゃんにそう言われたクリスピーノはその通りに対応したが、スピーカー越しのママは少々勘繰っている様子。

「お前の親やばくねえ？ これ、詐欺して集めた金ってわかってせびってきてんのか？」

さらにLINEを読み込んでいくと、ママが高いブランド品をねだるメッセージが散見された。

『クリスマス！ママが来月誕生日なの知ってるでしょ？ベントの約束忘れてないよね』

『クリ〜！ママばかりお金もらってパパがやきもち焼いてるから次はパパにもあげてね！』

こんなやり取りが複数あり、クリスピーノも期待に応えるように騙し取った金を家族に還元していた。醜悪だったのは、見せびらかすように札束のレンガを3つ手に持ってママに写真を送ったクリスピーノに対しての返答だ。

『クリは本当にすごいね！ママ、それ1つくらい手にしてみたいな。どんな気持ちになるカナ？』

万引き家族って映画があったが、こいつの場合、万引き家族もドン引きの詐欺家族ってなもん。

親も親で嬉々としてクリスピーノに集金の予定を聞いたり、カネカネうるさいんだ。

このママは何かまずいことが起きた場合、金は自分が責任もって隠すと主張する記

述まであるから呆れてモノも言えない。もう共犯と言ってもよさそうなレベル。

純ちゃんがその点をクリスピーノに聞いただと、青白い顔して奴はこう答えた。

「親は……ママは詐欺のお金だって知りません。っていうか、僕は詐欺してません。本当に違うんです！」

「テンプレ話で金引いて飛んでるんだから、詐欺だろうが！」

「いえ、飛んだりはしてません！本当に忙しかっただけで……」

一貫して詐欺ではないと主張するクリスピーノ。でも、被害者を前にその言いぐさはないよな。

「この小僧、やっぱり許せねえ」

よくわからない言い訳に逆上した小泉が、またヤツをぶん殴りそうになった。それをなんとかなだめながら、俺たちはクリスピーノの頭に紙袋を被せた。

五感のひとつを奪うと人間は不安になっておしゃべりマシンになる。その瞬間は何度も見てきた。

紙袋を被されたクリスピーノはこちらの質問にようやく答えるようになったんだ。「自分も上に騙されたんです」

「自分がポンジ話を考えて金を騙し取ろうとしたのではないんです。落ち度がある  
とすれば、ネタ元の話を精査せずに人から金を集めてしまったことで……」

これも「詐欺師あるある辞典」の最初のページに書いてあるくらい典型的な言い  
訳。「僕も被害者なんです路線」だ。

「その理屈ならどうして詐欺ってわかった後にてめえだけ高い買い物してんだ  
よ？ 西麻布のエルメス専門店でバーキン予約しちゃってるじゃん、お前。LINE  
E見るとどんどん出てくるなあ？」

「それは……来週大きなお金が入ってくる予定があるので先食いしただけで……  
あの……」

言い訳もしどろもどろだが、詐欺とわかって金集めをしていたとはどうしても言  
いたくないらしい。

「お前さ。女を孕ませて飛びまくってるな。家族には金配るくせにこういう対応  
しねえの？」

インスタのDMでクリスピーノに妊娠させられて飛ばれた女たちの悲痛なメッセ  
ージを純ちゃんが発見した。こいつに股を開く女もどうかと思うが、金にも女にも

だらしのない随分外道な小僧だよ。

「嘘だろ、お前。嫁と子供いるのかよ！」

福岡にタワーマンションを借りて、そこに妻と産まれたばかりの子供を住ませ  
ている事もLINEの履歴から発覚した。

やり取りを見るにこの嫁もクリスピーノが持つてくる金がまずいものと認識して  
いたのは間違いなさそう。

インスタグラムに飲んでいる場所を投稿する時は必ず時差を設けたほうがいいだ  
の、狙われているかもしれないから現金は持ち歩かず全部家に置けたの。細かく  
注意しているから、黒い金だと知らなかったは通らないだろう。

『子供も産まれたんだから、お金はクリスの実家ばかりじゃなくてこっちにメイン  
に運んで！ママにはあげすぎないほうがいいよ』

そんなメッセージも見つけた。あっちも詐欺家族ならこっちも詐欺家族だ。

騙し取った金を自分に渡せ自分に渡せと主張し合っている醜悪な様は、まるで画

面越しから腐った臭いがするかのよう。おぞましいにも程がある。

親鳥はひとかえりのヒナの中から餌を与えるべきヒナを決める時、ヒナがどの程度強く餌を求めているのかの質を伝えるシグナルに応答して一番強く求めるヒナを選好して餌を与えるらしい。

こいつも似たようなものかもしれない。強欲な家族から金を寄越せというシグナルを受信して、餌を探しに六本木の夜を徘徊する。

シヨークラブやキャバクラに張り巡らされた蜘蛛の巣は、金欲で目が曇った人間にはなかなか見えないもので、クリスピーノはそれを捕食して家族の元へと運ぶのだ。金の奴隷でありながら、家族の奴隷でもある。

なあクリス、お前は どうしてそこまで金を追い求めるのか。  
紙袋越しに右フックをお見舞いした俺は静かに口を開いた。  
「お前んち、今から集金に行くぞ」

\*

「僕の家に行くって……福岡にですか？ 実家ですか？」

こちらの顔色を窺うように、クリスピーノの口が開いた。

「そうだ。どっちにいくらあるんだ？ 多いほうから行くぞ」

そうは言ったものの、だ。こいつの実家は神奈川だから近いとはいえ、金庫番のママは相当に勘繰っている。もしもの時の合言葉を決めていてもおかしくない。

福岡まで行くのはさすがにナンセンス。いつ逃走しようとするかわからない詐欺師との長旅なんかごめんだから、金の在り処を吐かせておつかいの人間を飛ばすのが正解だろうな。

「博多ならすぐ動ける仲間いるよ。リーくん、いくらかつくれるよな？ そいつにお願いしようよ」

全国に謎のネットワークを張り巡らせる純ちゃんの手際よく中洲のサパーの店員に話をつけてくれた。となると、あとはいかにクリスピーノの嫁に怪しまれないよう現金や金目の物を運び出すかだ。

「おい、クリス。てめえも考えてみろよ？　フカシ話は得意だろ。電話した時に良からぬ事を考えないようにな。余計なことを口にしたらこれだから」  
ポケットからハサミを取り出した片桐はクリスピーノの目の前でチョコキチョコキと音で恫喝している。

ハサミを常に持ち歩くようなやつとは仲良くなれなそうだなと俺は思ったが、今は共闘しないとイケないのが辛いところ。

話し合った結果、こんな内容で嫁にアタックしてみる事になった。

中洲に今いる取引先とアポイントがあったけど失念して東京に来てしまった。確かに儲かる案件を振ってもらったから現金をその人に渡したい。けど今から移動するのでは間に合わない。だから今、家にある現金を後輩に取りに行かせるから渡してほしい――。

「振り込め詐欺の中継してるみてえだな、これって。良い気はしないが、やってみるか」

緊張に包まれた中、クリスピーノが嫁に電話をする。大事な場面だからあえてスピーカー通話にはしない。周りの雑音で異変を察知する可能性もあるからだ。こんな場面で俺はいつだってそうしてきた。誰に教わったわけでもない真理ってやつだ。「もしもし、俺。クリス。ちょっとお願いがあつて……」

純ちゃんがクリスピーノに顔をびったり寄せ、受話音声聞き逃さないように張り付く。途中、謎のハンドサインを送ってくる。

それから五分くらい話すと指で丸をつくって笑顔になった。大丈夫そうって事だろうな。

「じゃあ、後輩が下に着いたらまた電話するね」

そう言ってクリスピーノは嫁との通話を切った。こうなると話は早かった。純ちゃんの先から「2000万が入った靴箱を回収した」との連絡が入る。写真も送られてきてようやくやく一安心だ。

こっちが依頼を受けているのは合計2300万だから、これだけあればもう、まくったも同然。

問題は片桐だ。ここまで分配について取り決めをせずに一緒に動いていたが、現金が手に乗った以上は話をしなくてはならない。

純ちゃんが願望丸出しで畳み掛けた。

「片桐さんらって1億いかれてるんでしょ？　こんなの分けたところで焼け石に水で大変そうですね」

「俺らもあと300万、足りてないしなあ。そこでどう？　俺たちはこの2000万とこいつが持つてるロレックスだけでいいから、今日は花持たせてもらう。代わりにかいつの身柄はそちらさんに渡すっていうのは」

感触は意外に悪くない。片桐らはクリスピーノと共通の人間関係も多く、その気になればまだまだ金を引かせる自信があるらしい。

ボンジと分かりつつも結果的に利益を出している過信もあったんじゃないかと思う。片桐は見た感じまだ若いし、腹八分目を知らないというか、頭から尻尾まで取ろうとして失敗した苦い経験がなかったのかもしれない。

「なあクリス。まだ実家にいくらか置いてるんだろ？　お前の事を信じてる客もいるよな。俺たちはここで引くけど、片桐くんのやつもちやんと最後までやるんだぞ」

純ちゃんはもう既成事実かのようにクリスピーノに凄みだしている。一刻も早くここから撤収したい俺もこの茶番に便乗する。

「とりあえずこれで愛梨と和彦さんの分は完済って形でいいよ。デコにも走らせねえから、片桐くんのやつ気合い入れて集めろって」

ここまでの金品はすべて俺たち。ここからの身柄は片桐。圧倒的に俺たちに優位な着地点はもう、すぐそこだ。

「片桐さん、もしよかったらSIGNAL交換しませんか？　こいつが逃げたりしたら、いくらでも協力するんで。それとこの後こいつ連れて行く先ってありますか？　いいカラオケありますよ」

仲間感を出す純ちゃんに悪い気がしなかったのか、明確に口には出さないものの片桐はもう俺たちの提案を受け入れたようなかんじ。その間に灰皿の中身をゴミ箱に捨てたりペットボトルを片づけたりと、俺ももう野面で帰る準備。このままクリスピーノの身柄を渡しておさらばすればもう大丈夫だ。

外に出る時、恩着せがましく見張りの手伝いをするのも計算ずく。両サイドから腕をロックして片桐の迎えの車まで連行した。

「じゃあ片桐さん、なんかあったら連絡くださいね！」

「はい、純さんもリーさんも本当ありがたいございます」

身なりはアレだけど、根っこがいいやつなのかもしれない。

金もブツもこつちが全取りなのに身柄を渡しただけでこちらが良い事をしたかのような別れ方だ。

しかしすべての嘘がめくれたら、クリスピーノと片桐の関係は今まで通りにはいかないだろう。

これまでは信じたフリをしながら暗黙の了解でポンジをさせていた片桐も、これからはその暴力性を剥き出しにした付き合い方をするはずで、もうクリスピーノの言い訳は聞いてもらえないはずだ。

いつどこで誰から集金するだの配当がもらえるからだのって時間稼ぎはもう使え

ない。グルグル巻きにされて、理由は問わず金を持ってこないと解放しない”という付き合い方になるのは確実だろう。

ふたつの家族にせつせと餌を運んでいた親鳥は、これからは捕食者にだけ金を運ぶようになって、最後はその身ごと食われるだけだ。

深い時間に純ちゃんたちと別れた俺は寄り道もせず帰路についた。「アドレナリンが出て眠れない夜にはCBDがいい」って知り合いの不良が言ったのを思い出して試してみたものの、まったく効果がない。台所にあったタリスカートをラッパ飲みしてベッドに身体を預けた。

たしか、月はまん丸でデカかった気がするよ。決して掴めないものでも、遠くに見えたり近くに見えたりよ、そりゃ騙されるやつも後を絶たないぜ。

窓越しのお星さまに向かって独り言を呟いていたらいつのまにか寝ていたらしい。起きたら点けっぱなしのテレビから安っぽい昼ドラが流れていた。

疲れて寝落ちした事務所のソファが固いせいか、珍しく早く起きた水曜日の朝。雨が窓を叩いていたから二度寝を決め込もうとしたが、どうにも喉が渇くもんだから仕方なく体を起こしてキッチンまで歩いた。

雨の日の二度寝は心地が良い。  
一定のリズムはあるものの決して規則的ではない雨音の独特の揺れを「1/fゆらぎ」と呼ぶが、ヒトの生体リズムとこいつが互いに呼応し合うのだ。

ジョイントの一本でもあれば雨音のホワイトノイズの中からさらにハイパーソニック、つまり高周波を聞き取りやすくなって、脳がα波を発している様を感じ取る事もできる。

いや、そんな気がするだけか。まあそんな気がするだけにしてもだ。人生において、そんな気がする”って事は大事なんだよ。

恋愛にしたってそう。本当にこいつの事を愛しているのか、それとも、そんな気がしているだけなのか。仕事も学校もそうだろ？ 感覚的なものじゃなくて、科学的根拠や確信を持ってそいつを選んでいるって人間が一体どれだけのいるのか。

雨の日になると、昔の女を思い出す事がある。

もう何年も経つが、あいつが死んじまってから急に自問自答する時がたまにある。俺は本当にあいつを愛していたのか。それともまだ駆け出しだった小僧がそんな気になっていただけだったのか――。

そんな事をぼんやりと考えながら明治ブルガリアヨーグルトをスプーンで掬っていると、すっかり目が覚めていた。こいつにブルーベリー味以外の選択肢はない。まあそれも、そんな気がする”ってだけなのかもしれないな。

「あいつ起きてるかな」  
スマホに目を落とした俺は、独りごちた。ポンジ詐欺師からのキリトリを依頼してきたホステスのルイだ。

ハメ呼びからまさかの利益相反者とのバッティングと波乱はあったが、結果をみれば昨日のシノギは上々。長かった夜の手取りはそれなりに高くついてもらわないと毎回こんな事はやってられない。